

## 第二回 鳴海英吉研究会

〈日時〉二〇〇五年十月十五日

〈会場〉市川・ヤマザキパン企業年金基金会館

〈主催〉鳴海英吉研究会

〈プログラム〉

司会…芳賀章内、鈴木比佐雄、大掛史子

### ◎第一部 記念講演

柴田三吉「鳴海英吉の戦争詩とアジア」

水崎野里子「鳴海英吉の演歌的叙情性と国際性」 >>>

### ◎第二部 スピーチと鳴海英吉の詩を朗読

岸本マチ子、玉川侑香、葛原りょう、岩下夏、

李美子、尾内達也、遠山信男、鈴木文子 >>>

### ◎第三部 シンポジウム／鳴海英吉の詩と朗読

コーディネーター…佐藤文夫

パネリスト…上手宰、本多寿、辻元佳史、原田道子 >>>

(敬称略)

## 第二回 鳴海英吉研究会

### ◎第一部 記念講演

柴田三吉「鳴海英吉の戦争詩とアジア」

水崎野里子「鳴海英吉の演歌的叙情性と国際性」

#### 【開会の挨拶】

芳賀章内 今日にはほんとうに錚々たる講師や皆様お集まりいただき、主催者側は大変感激しております。私は鳴海さんと同人として一緒だった「鮫」の芳賀章内です。よろしく願いたします。

きのう、あまり僕の部屋が汚いものですから整理をしていましたら、鳴海さんのお亡くなりになる年の年賀状が出てきました。そこには鳴海さんの「二〇〇〇年の辰年、新世紀献上」という印刷文のご挨拶がありまして、そのあとに次のような添え書きがありました。例の四角張った字です。《お荷物にならないつもりが 新世紀まで生きちゃって、なんと 喜寿と重なるとは笑わせませう》

——こういう文面でした。これを読みました時に僕は、鳴海さんの人柄を彷彿としてよみがえってきました。しばらくこれをじっと見ておりました。ほんとうに鳴海さんの人柄と作品というのは、非常に対応しているというようにその時に思ったものです。

この第二回の鳴海英吉の研究会の前の、いわゆる第一回の鳴海英吉研究会は、鳴海さんの詩的出発ということになりましょうか、戦後の「列島」の時代の若き鳴海像について長谷川龍生さんにお話をいただきました。そして今度は第二回目です。皆さんもお読みになったと思いますが、この八月号の『現代詩手帖』の特集というのが「戦後六十年〈現代詩〉再考」と題したもので、戦後を支えた九十五人くらいの作品を紹介し、そしてご出席の皆さんが解説の座談会をしておりました。その中に先の長谷川さんも出ておりました。長谷川さんはその中に鳴海英吉の「へんろ道」というのを戦後の代表作の一つとして載せました。それを読みまして、僕はやっぱり鳴海さんの詩は朗読に非常に向いている作品じゃないかということ改めて考えさせられました。つまり「朗読」というこの言葉、これが今回のテーマであることの妥当性を再度確認させられたわけです。そして有り難いことに、このテーマに非常に強い講師や皆様にたくさんお集まりいただきました。これできっと非常に新しい、いわば今までの朗読というものの盲点を見出したり、あるいは理解の幅を広げることが今日ではできるのではないかと思った次第です。ほんとうにその意味では講師や皆さんは朗読研究心に熱心しかも、朗読に長けていますので、繰り返しますが、おそらくこれらのお話を上手に整理しますと日本の今日の新しい一つの朗読方法を見出すことになるのではないかという感じもいたします。

朗読というのは、必ずしもみんな喜んでいのかどうかということは分かりません。例えば、その「現代詩手帖」八月号で吉増剛造さんは「括弧付き朗読否定論である」ということを言っています。「括弧付き朗読否定」というのはなかなか面白い言い方です。しかし「括弧付き朗読否定だから朗読しておる」と——こういう言い方です。つまりかれは、朗読はしているんですね、実際。それから、大分むかし、荒川洋治さんは「まだその朗読をする前に私にとってはやることもある」というようなことを言っております。しかしこの両者ともいわば「軋み」というか、音声と文字の軋み、あるいは言葉と思想の軋み、あるいは言葉と表現の軋みというのを考えているからで、最終的の根本的なものとしては人間

の声というのをやっぱり否定できないところで苦労しているというようなことじゃないかと僕は思っております。つまりり言語を——内言語、内言あるいは内語と言いますか——表に出ない言葉、声や文字になる以前の言語というのが人間の内側にあるとすれば、それがすぐに声に結びついたのが口承文芸というふうな形で現れているのではないかと思います。そしてその内言語がまずは記述化される文字言語になり、その文字言語が声に結びついた時に「朗読」という一つの構造ができておるんじゃないかというように考えるわけです。そしてその文字言語と音声言語、文字言語と内言語、その間の軋みがですね、やっぱり一つの、彼らが朗読を否定したり「括弧付き」と言わなければならないところではないかと、僕は推察したんです。それで今日僕はそういう意味では、今日の講師や朗読者たちはそれをどのように超えていくか、きっとその軋みを上手に埋めていこうということ非常に期待しているんです。僕は、三、四年前に「詩人会議」で朗読の特集をしたことがありましたが、あれを読みました時にやっぱり「軋み」というのをどのように乗り越えるかということが非常にいろいろな形で問題になっていると感じたのです。ここにご出席下さっている、玉川侑香さんとか遠山信男さんなどがエッセイを書かれているのですか、やっぱり「声」とポエジーというのを結び付ける非常に大きな問題がたくさんそこで拡がっているということを見たわけです。そういうことですから僕は今日は非常に楽しみにして、今後の展開を見ていきたいと思っております。またシンポジウムや朗読の前に、鳴海詩の今日的意義についても斬新的視角から柴田三吉、水崎野里子の講演もあります。鳴海詩の内容と形式の両面から、その本質に迫りますので、恐らくご出席の皆さまは失望することはないだろうと思っております。ほんとうにそういう意味で、今日はお家に帰ります時に素晴らしいお土産をたくさん持って帰れるのではないかと思っております。最後ですが、今回の会を組ませていろいろなことをができますのは、ここにおられる鈴木比佐雄さんをはじめ佐藤文夫さんや大掛史子さんの千葉県勢の活躍の賜であります。僕は埼玉で付録の方ですから、最初の窓を開ける役目を仰せつかりましてご挨拶をさせていただいたのです。よろしく願いたします。(一同拍手)

鈴木比佐雄 初めの方もおられると思うので、かいつまんでこの会の成り立ち及び方向性を少しお話しさせていただきたいと思っております。

二〇〇〇年の八月末に鳴海さんが亡くなられた時に鳴海さんを後世に残そうという声拳がかりまして、「COAL SACK」に鳴海さんがずっと寄稿して下さったということとあと「炎樹」「鮫」「光芒」の主宰者及び代表者が集まって「鳴海英吉全詩集刊行会」というのを作りまして、その後二年をかけて二〇〇二年の八月の命日にこの『全詩集』を刊行しました。翌年の二〇〇三年の春に、ここ(ヤマザキパン企業年金基金会館)で宗左近先生に講演をしてもらって出版記念会をやりました。その後昨年「第一回鳴海英吉研究会」を九月にやりまして、今回は二回目になります。今回に関しては、今年は終戦六十周年・日韓条約四十周年ということもありまして、そういう記念すべき年だったにもかかわらず、歴史認識の違いによって反日の嵐になってしまった。そして日本の中からはいわゆる脱亜論的な、百年前を彷彿させるような非常にアジアとの距離をとっていく論調もたくさん出てきたということもあって、日本、中国、韓国、北朝鮮など国家がナショナリズムを煽るような状況になってきました。鳴海さんが亡くなる直前まで「戦後詩の根本というのは民主主義だ」ということをよく言っていたんですね。あと「アメリカのシステムは日本を滅ぼすんじゃないか」とか、そういうようなことも言っていましたが、鳴海さんは民主主義をとっても大切に考えていました。詩を書ける環境は自由で民主主義でなければ不可能だと痛感していたからでしょう。アメリカに関しては「アメリカ型の民主主義が全てではないんだ」というような考えをもっていましたね。それは仏教思想の中に民主主義が根底にあることを洞察していたからなんですね。それで今回の講師を選定する上においていろいろ四人の実行委員たちが考えて、やはりアジアの眼差しをもった詩人であり詩論をもっている方をお願いしようということで、それで先ず柴田さんをお願いしたいなと。柴田さんは昨年『遅刻する時間』という素晴らしい詩集を出されて、その中で非常に感心したのがポルボトの墓を見に行き、「蟬」という詩を書かれているんですがね、ここで書かれていることは、ポルボトがタイヤと一緒に燃やされた墓があるところに行って、蟬を聞くんですね。そこでアジアの民衆っていうんですか革命の名の下に殺されたたくさんの民衆たちの無言の声を聞こうとするわけですね。——そういうアジアの民衆の視点ですね。そういう視点

がやはり今こそ必要だと。そういう視点から鳴海さんを語ってもらいたいというような思いがあります。あともう一人水崎さんは、この中でも鳴海さんと接したことがない、詩もあまり読んだことのない人もいたかも知れませんが、生前の鳴海さんを知らずに『鳴海英吉全詩集』を読んで本当に評価してですね、鳴海さんの持っている精神が今の世界の詩と繋がっているということをいち早く言ってくれて、いろんな海外の詩人にも紹介してくれています。今の世界の主流になっている詩がやはりマイノリティーだとか、フリンジという周辺とかそういうものであって、今のそういう日本の現代詩はちょっとおかしいんじゃないかと盛んに言われている。それで鳴海さんの持っている革新的な叙情性が世界に続いて通じているんだということを論じています。今日はその二人に語っていただきたいと思っています。では、柴田さんからよろしくお願いします。

《鳴海英吉の戦争詩とアジア》

——柴田 三吉

私が鳴海英吉さんと知り合ったのは、二十三年前のことでした。私が詩を書き始めてまだ五、六年だったでしょうか。当時、私は「ぜろめーとる」という、小さな詩のグループに関わっていたのですが、月一回の例会に、鳴海さんが、ときおり遊びに来るようになったのです。

鳴海さんは、皆さんもご存知のように、よくお酒を飲む人で、酔っ払うのも早かった方だったと思います。だいたい陽気で穏やかな酒でしたが、「ぜろめーとる」では、ときおり飲みすぎてくださる巻く、ということもありました。そんなとき、私も若かったので「もういい加減にしない」と、怒鳴ってしまったことが、何度かありました。

鳴海さんを怒鳴りつける人なんて、あまりいなかったと思うのですが、お酒をさほど飲まない人間は、酒飲みに対して、ひどく不寛容なところがあります。

そんなことがあると、決まって二、三日後に鳴海さんから、「柴田くん、また怒られちゃった」という、茶目っ気たっぷりな「詫び状」が届くのです。「詫び状」というのは、鳴海さん自ら、葉書の一行目にそう記していたからです。記憶では、たしか三枚くらいもらったと思います。

「ぜろめーとる」で、鳴海さんとはさまざまなことを話したはずなのですが、肝心な戦争体験について聞いたことは、あまりありませんでした。鳴海さんはかつての「列島」時代の話や、父親がやっていたという、映画の弁士の話、あるいは仕事の話などを、好んでしていました。

それでもあるとき、どんな流れからだったか、靖国神社の話になったことがありました。そのとき鳴海さんは即座に「あんなもん、どうしようもねえや」と、吐き捨てるように言ったのです。

ほかに一つ、鳴海さんの口癖で、忘れられない言葉があります。それは、「いまの若いもんは、もう一回戦争してみなけりや、あの苦しさは分からねえよ」という言葉です。

それを聞くと私は、鳴海さんは心の底に、普段のバイタリティとはべつな、大きな絶望を抱えているのだな、と思ったものでした。

鳴海さんの絶望というのは、自分が体験してきた「戦争の記憶」は、他者には、絶対に伝わらないだろう、という虚しさに近いものだったかもしれません。それでお酒の入る席では、あまり具体的なことを語ろうとしなかったのだと思います。

けれども鳴海さんは詩で、シベリアの抑留体験を書き、その後、中国戦線の体験を書き続けました。文学は信じていたわけです。信じていた、というよりは、詩でしかそれを語れなかったのだと思います。

これはナチスの、絶滅収容所を経験した作家たちと共通するところがあります。体験したことを、体験のない者の前で話すことの困難です。あるいは、なんとか話しおせたと思っても、それが、聞き取られていなかったのではないか、という虚しさです。

話し言葉というものは、口から出たとたん消えていきます。消えていくものだからこそ、言葉は、き

ちんと受け止めてくれる他者、記憶してくれる他者、というものの存在を、求めるわけです。けれど、そうした受容器としての他者は、多くはありません。

そこで、ある種の人々は文字にして、自分の体験を残すことを考えたのではないかと思います。文字ならば、たとえそのとき、読む者がいなくても、この世界に後世まで、存在し続けるからです。

少年時代に、絶滅収容所へ送られ、かろうじて生還した、エリ・ウィーゼルという作家は、のちにこう言っています。

「アウシュヴィッツが出現するまで、だれも、アウシュヴィッツを想像できなかったように、アウシュヴィッツが滅んだあとも、だれも、それを再び語ることはできない」

ここには、人の想像力の限界が語られています。また、体験の伝承という不可能性を前にしての、大きなジレンマが語られています。だれも想像できなかった出来事、あるいは精神的、肉体的な痛苦は、どのようにしてもその全体を、他者には伝えきれないものだからです。

現在、詩を書いている私たちは、そうした一次的な体験を、他者に移しかえることはできない、ということを知った場所から表現にかかわっています。そこに、フィクションなどの方法も発生してくるわけです。事実を組み替えたり、変形させたりしながら、作者の内的な事実の方へ、読み手を導いていく方法です。

けれど、アウシュヴィッツやシベリアを体験した人たちは、そうした文学的なまわり道はできませんでした。もっと切実な場所で表現と向き合っていた彼らは、自分の体験を、フィクションに託して語ることはできませんでした。

それよりも、事実を正確に記しておかなければ、人間が何をしたか、そのとき人間はどういう状態だったのか、ということが、すべて闇の中に消えてしまうのだ、と考えたのでした。

書かれなかった、記録されなかった、ということは、事実そのものが、この地上になかったことになってしまいます。なかったことにされてはたまらない、かりに伝わらなくても、あった、ということだけは残しておきたい。そういう、止むにやまれぬ気持ちで、彼らは作品を書き綴ったのではないかと思います。

結果的には、そうした彼らの、比喩ではなく、まさに「身を削る表現」によって、人間の極限状態を記した文学がかろうじて残っているわけです。鳴海さんで言えば、シベリアの収容所の体験、中国での戦場体験が残されたわけです。

それらは、たんなる記録ではありません。記録ならば、歴史学者が記してくれます。そこに描かれているのは、もっと生々しい、生理的な体験であり、そこから発生する人間存在への、哲学的な問いかけです。

さきほど私は、鳴海さんは絶望を抱えていたのではないかと、言いましたが、それはいま言ったような伝達のジレンマを、鳴海さんもまた抱えていた、という意味です。他者に、シベリアの寒さが伝わるのか、飢えが伝わるのか、人間の死という実存が伝わるのか、というジレンマです。

そうしたことを考えながら、今回もう一度、鳴海さんの詩を読み返して強く思ったのは、鳴海さんの詩は、どれも独白に近いものだな、ということでした。出来事を、レトリックに頼らず、裸のまま記しています。

もちろん、事物を裸にして差し出すには、書くことと、書かないことを選択という、べつな意味での修辞が必要になりますが、それはきょうの話から逸れるので、ここでは触れません。

ともかく出来事の全体を、あとの記録や、知識を加えて伝える、というものではないのです。あくまでも、鳴海さん自身が見たこと、体感したことに、内容は限定されています。ですから、視点は常に一点からのものです。単一者の、ミクロの視点、記憶だけを手がかりに、手に触れ、目の届く範囲のことだけに、限定されています。

その結果、鳴海さんの詩は、精神的、肉体的な痛苦を、手触りに近い感触で私たちに喚起させます。それらの作品を読む私たちは、不十分ながらも、身体的な想像力で鳴海さんを追体験していくことができるわけです。

それは、鳴海さんが意図したことの、数パーセントか、数十パーセントは分かりませんが、とにかくゼロではない。ゼロでないということが、大切なのだと思います。

きょうは「鳴海英吉とアジア」というテーマなので、「ナホトカ」からは離れて、詩集『銃の来歴』について考えてみます。この長編詩集を読むと、鳴海さんが中国大陸、あるいは戦場で置かれていた位置が、とてもよく見えてきます。

鳴海さんは工場労働者として、戦前は左翼的な文化活動をしていました。そのために、軍隊に徴集されたあとも要注意人物として、戦地でもいちばん危険な場所に配属されます。

ようするに、捨て駒の兵隊だったわけです。マルキストであり、この戦争はアジアへの侵略戦争である、という自覚を持っている兵隊、なおかつ、国家から捨てられた兵隊です。

それでも一人の人間としては、生き残りたい、という本能があります。ですから、目の前に敵が現われれば銃を撃つし、殺しもします。

一人の人間が、いくつもの重石を背負わされて、戦場に投げ出されていた、ということです。たとえるならば、すり鉢の底で、スリコギ棒で潰されていくゴマ粒のようなものです。

このとき、鳴海さんが戦った八路軍の兵隊も、同じようにゴマ粒みたいな存在だったのだと思います。消耗戦が行われている、すり鉢の底では、侵略国の兵隊と、それを打ち破ろうとする兵隊という、立場の違いはあっても、どちらも、捨て駒であることに変わりなかったのではないのでしょうか。最前線で実際に戦わされるのは、だれもかれもが、社会の底辺から、かき集められた人間です。

つまり、鳴海さんのいた戦場というのは、国家や軍隊という機構から見捨てられた人間たちが、ぐちゃぐちゃに入り混じって殺しあう場所だったわけです。そこでは、生き残りたいという、肉体的な思考だけが、リアリティのあるものだったわけです。

詩集『銃の来歴』を読んでいるとき、私はふと、カフカの『万里の長城』という作品を思い出しました。

この物語では、皇帝の命で、国中の人々がある日突然、駆り集められ、長城づくりをさせられます。現場で日干し煉瓦を焼き、積み上げていく人間は、自分が何のためにそこにいるのか、この先何年働けば自由になれるのかも分からない。皇帝の、官僚機構の側からすれば、一人ひとりの人間なんて、やはりゴマ粒のような存在です。すり減ったら、また新しいゴマ粒をかき集め、投げ入れてやればいいだけのことです。

そんなふうに、カフカの作品と重ねて読んでいくと、すり鉢の底から上を見上げている、鳴海さんの目が見えてきます。オレたちを、こんなところに放り込んだやつは誰なんだ、その仕組みはいったい何なのだ、という視線です。

すり鉢の傾斜を辿って上部の縁に行き着けば、それが軍隊、軍隊を統べる、国家という枠組みです。それだけではなく、枠の上にはさらに、天皇という、不可侵の存在が浮かんでいました。天皇は長城の建設を命じた、皇帝と重なってきます。

鳴海さんが一個の兵士の視点にこだわり、執拗にすり鉢の底の戦場体験を書いた意味は、そうした国家や天皇の存在と「自分たちの体験」を、観念ではなく、肉体的なりアリズムで対峙させたかったからではないかと思います。

いま「自分たち」と言いましたが、それは、殺し合いの場にいる八路軍の兵隊、農民たちを含めての視線です。作品の中では、そうした人々の様子がむしろいきいきと描かれています。

今回、この詩集を私が読んで気づいたのは、そういうことなりました。敵とか味方ではなく、その場に投げ込まれたすべての人間と、人間をゴマ粒にしてしまう仕組みとを、鳴海さんは対峙させたかったのだと思うのです。

そうしたアジアの人々の視線を取り込むことで、鳴海さんの詩は、個の視点でありつつ、他者の視点を孕んでいったわけです。これは私にとっても、とても新鮮な発見でした。

ところで、日本の、アジアへの戦争責任を考えるうえで、靖国神社の問題は、避けて通れない場所だと思います。

はじめにも言いましたが、靖国神社について鳴海さんは「あんなもん、どうしようもねえや」と、即座に吐き捨てました。靖国神社というのは、鳴海さんにとってすり鉢の上部にある抽象的な存在を、目に見える形にしたものだったと思うのです。

「死んだ兵士の眼で……」というエッセイがあって、その中で鳴海さんは、こんなことを書いています。

例えば戦争です。戦争で失ったものは沢山あるのですが、まず沢山の死んだ兵士たちのことをそのまま、記録もされず、ないものにしていいかどうか、年一回戦死者のみ魂が浄められ、浄められることで、戦争を忘れさせようとしていること、次の戦争のためにも、いつも、靖国神社はからっぽにして、いつでもみ魂を迎える準備をしているのではないのでしょうか。靖国神社は、そんな意味からも、いつも浄められなければならない訳です。でも本当に兵士たちのみ魂を浄めてしまうことでしょうか。ぼくは残酷にも、死んだ兵士は決して眠ってはいけなく、眠りのない死を強要してしまうのです。怖いことです。

このエッセイ全体の中で、鳴海さんは、いくつか大切なことを言っています。

一つは、死んだ兵士たちの存在を、ないものにしてしまっただけはいけなく、けれども、その記録は国家によってなされるものであってはいけなく、ということです。

もう一つは、国家が鎮魂をする靖国神社の本質として、そこは常に、国家の思惑によって空っぽにされていくのだ、と見抜いていることです。み魂の清めは死を浄化し、死のむごたらしさを無色のものにしてしまう。それは、次の戦死者を迎えるための準備なのだからと。

そうして、この二つの認識の結果として鳴海さんは、死者を眠らせてはいけなく、と言うのです。「眠らせない」ということの意味は、たんに死者を呼び戻す、ということではありません。鳴海さんが死者の側に立って、死者を揺り起こしていく、ということです。ですからまさに「怖ろしい」ことなのです。

ちょっと話は逸れますが、先日、映画の試写会へ行くため銀座を歩いていたときのことで。私はテレビの街頭インタビューに呼び止められました。それは、小泉首相の靖国神社参拝についてどう思いますか、というものでした。

私は、これから見る映画についてぼんやりと考えながら歩いていたので、とっさに頭が切り替わりませんでした。それでも「総理大臣や閣僚の参拝は、明確な憲法違反でしょう」と答えました。

インタビュアーは興味を示し、そのあと五分ほどのやり取りとなったのですが、私は普段考えていることを整理して話すことができず、悔いが残りました。

けれども後日、そのニュース番組を見ると、私が話した五分間は、まったく使われていませんでした。代わりに「小泉さんは頑固者だからなあ」とか、「外国から批判されたって、自分の信念を貫けばいいんじゃない」といったコメントが、いくつも流されていました。

それはともかく、私もまた、鳴海さんが言ったのとはべつな角度から、靖国神社というものの存在は論理的矛盾を孕んでいると、日ごろから考えてきました。

かつてそこは、戊辰戦争での、官軍の戦死者を祭るために創建された場所です、以後は、他国との戦争で戦死した者の魂を祭る場所へと変わっていきます。つまり、国家、あるいは天皇のために命を捧げた人に感謝し、鎮魂をするという場所です。

現在は戦犯の合祀をめぐる、韓国や中国との軋轢が生じていますが、私が論理的矛盾と考えるのは、それ以前のこととして、この靖国神社の目的についてなのです。

まず、戦争に駆り出された兵士たちはほんとうに、「国家」のために死んだのだろうか、という疑問があります。私には、とうていそうは思えないからです。

明治維新から第二次大戦終了までのあいだに、国民は、それまで考えたこともない「国家」というものの幻想を、教育によって強く植え付けられ、愛国心を刷り込まれていたのです。また、たびたび「国家」の誤った戦争政策によって、アジアへと出兵させられていたのです。

庶民の生活感情から言えば、戦争なんてものを望んでいたはずありません。教育によって、否応なく他国を侵略し、その国の人々の命を奪う兵士に作り上げられていったわけです。

当時の庶民は、それに対して、ほとんど抵抗するすべを持っていませんでした。政治に関与する仕組みそのものを持っていなかったからです。それなのに現在もまだ「国を守るために戦い、死んでいった人々」という言説が中心になっていることが私には不可解なのです。

政府は、第二次大戦が侵略戦争であったことを対外的には、公式に表明し、謝罪しています。にもかかわらず国内では、その侵略戦争の戦没者に、国家として感謝する、と言っているのです。これは外側と内側に向けて、二つの顔を使い分けていることとなります。靖国問題のねじれは、じつはここから生じているのだと思います。

国家として過去の政策の過ちを認めるなら、政府は、国民に対しても感謝ではなく、謝罪をしなければならぬはずなのです。そうした一貫性をもって、侵略した国の人々に対して謝罪しなければならないのです。

理不尽な行いを強制し、国民が穏やかに暮らしていく権利を奪ってしまったのですから、それに対して、深く頭を下げなければならないはずなのです。

つまり、日本という国家の戦争責任は、アジアの人たちに対してだけでなく、日本国民に対してもあるわけです。けれど国のために死んだ兵士に感謝する、という言葉、論理は、国民に対する、国家の戦争責任を覆い隠し、なかったことにしてしまいます。とても分かりやすいカラクリなのに、どうしたわけか、靖国神社とかかわる発言で、だれもそのことに言及していません。

鳴海さんが言いたかったことは、これと同じことだったのではないかと、私は考えています。戦死者を国家が記録し、鎮魂をするということの欺瞞。感謝と鎮魂によって、靖国神社をからっぽにし、ふたたび国のために戦う兵士を準備するというくらみ。

とりわけ、捨てられた兵士としての鳴海さんには、感謝という言葉は、なによりも我慢ができないことだったと思います。

私たちは、鳴海さんや、ほかの人々が残した戦争体験をたくさん持っています。彼らが自分の負った傷口をもう一度開き、それを記すということは、大きな痛みを伴うものだったはずです。

けれどそれだからこそ、彼らの、伝達の不可能性に立ち向かった勇氣は、私たちに、新たな希望を喚起させてくれます。

人が考えることを放棄せず、記すことを放棄しなければ、書かれたものは必ず、読む者に何かを伝えてくれるものです。皮肉なことですが、希望というものは、絶望をくぐり抜けたところにしか生まれてきません。

それでも鳴海さんが言ったように、私たちがもう一度、戦争を体験してみなければ、その痛みが分からないのであれば、人間は、ひどく愚鈍な生きものだ、ということになってしまいます。それだけは絶対に避けなければならないことだと、私は強く思っています。

## 《鳴海英吉の演歌的叙情性と国際性》

——水崎 野里子

柴田様には素晴らしいお話をいただき、ありがとうございました。アジアの視点、この視点から他者の視点へ、靖国崇拝の問題、アジアへの戦争責任の問題、——鳴海英吉の詩のベース、初め的一步から最後までおっしゃって下さいました。国家における鎮魂の問題、それから今の靖国参拝の問題など、具体的にイラクへは自衛隊が出兵してしまったので、その新たな状況が、今なぜ鳴海英吉か、という新たな問題なのでしょう。私がいただいた問題は、その上での「学問的位置付けと国際性」ということだと思います。

具体的になぜ私が鳴海英吉の詩に惹かれるかと申しますと、この間の研究会でも申し上げたように、『鳴海英吉全詩集』の二カ月くらい前に私は『現代アメリカアジア系詩集』を出版しています。それからその当時私は、具体的には第二詩集であります『アジアの風』というのを用意しておりました。これはその年の七月に出版されるわけで、具体的にアジアの問題とそれから日本のアジアへの戦争責任の問題が、当時私の翻訳の仕事、創作活動と偶然に重なって参りました。その重なりは偶然というのではないと、この間の研究会で申し上げました。それでその後、マイノリティの問題、フリンジ問題の視点から、日本の詩の状況を眺めた場合、もはや日本以外の殆どの国々がポストモダニズムに入っているにもかかわらず、日本ははまだモダニズムの状態にある、と認識することたびたびでした。隣の韓国、アイルランド、メキシコなどの南米、スペイン語圏の国々などです。西洋の植民地だった国々が十世紀初めから次々と独立して行くわけですね。アメリカもそうです、イギリスから独立したわけですから——それで、支配国に押さえ付けられて反抗したり、流血、無惨の惨事がいくつもありました。例えばアイルランドなどはイギリスに対して何度も独立を求め、軍隊で蜂起しても何度も鎮圧されてしまいました。その中で、アイルランドのシェイマス・ヒーニー、南米のボルヘス、オクタビオ・パス、ガルシア・マルケスなどが、必死に自由のために闘って、何人かはノーベル賞を取ってもあります。ということは、だんだんと世界の文学地図が変わっていくことです。かつては押さえ付けられ、無視されていた、非支配国、植民地国家の文化の方が着目、止揚されて行きます。そういう二十世紀的な文化状況の中で、アメリカのアジア系詩人、さらには「チカノ」と呼ばれるメキシコ系のアメリカ人の詩と文化が今、注目されています。そういうグローバルな文化状況の中で、マイノリティとフリンジの問題を突き詰めて行くと、その中間でちょうど私が日本で出会った人間が、鳴海英吉であったということです。

いわゆる西洋のモダニズムと言われるのが、T・Sエリオット、ジェイムズ・ジョイス、W・Bイェイツ、エズラ・パウンド等、一九二〇年代を中心とする芸術活動です。この研究というのは、私は専門の研究者ですからやっていますし、やらなければならないのですが、やはり一方では、日本のアカデミズムはまだ、ほとんどモダニズムから出てはおりません。一九五〇年度以降の文学の中では、シェイマス・ヒーニーがようやく我が国の受容に入り始めたという状況です。そのモダニズムの残滓が、まだ日本のトップの詩人の中に残っています。それで具体的に、かなりこちらがマイノリティとフリンジの問題を申し上げて分かっていたらと思っても、自然にすぐまたモダニズム的志向、ホホワイト志向

に戻ってしまう。一九二〇年代のアヴァンギャルドと言われる文化主潮からいまだ逃げられないというところで、これはどうしようがないという現在の心境です。でも、この頃だんだん分かって来て下さったようです、このような会に私、お招きいただけるのですから。

私、本年(二〇〇五年)八月、ロサンジェルスの世界詩人会議で英語で詩を発表して参りました。私が選んだのは「ヒマラヤの少年」という題の詩と、英語での短歌でした。ヒマラヤへは三年くらい前にみんなで行ったのですが、今はもうマオイストに侵入されてしまっとうしようもないのです。また、ロサンジェルスのダウンタウンは、人口の半分くらいがメキシコからの移民ということでした。ロスでの詩人会議も、多数、キューバやコロンビアなど、南米、イスパノ・アメリカ(スペイン語圏)の詩人が目立ち、それに日本、台湾、韓国などのアジア、チェコスロバキアやフィンランドのヨーロッパからのマイノリティの詩人の活躍が目立ちました。アメリカ国籍であっても、南アメリカ出身で、アメリカに職を持っているマイノリティの詩人で、英語はしゃべるけれども母国語はスペイン語、英語は私の方が出来る、というような感じもしばしば受けました。そのことを日本で上げると、「それは三流の詩人会ではないか」と言われたりしましたが、そうではなくて、結局、大手の世界の中では、既にマイノリティの詩人が世界、インターナショナルな次元では優勢を占めてしまっているということです。もう前衛はなくなっているということ。こちらでは私は「前衛だ、前衛だ」という感じで声を上げなければならないのは、これはやはりしようがないです。学者の論理というのは、最初はそういう訳なのでしょう。そこでエピソードを一つ。ロスで一人の台湾国籍の詩人とお友達になり、会議のあと、ラスベガスへのアディショナル・ツアーに御一緒しました。ラスベガスで、彼女がインターネットカフェに行こうとおっしゃるのです。私、御一緒しました。彼女、インターネットカフェで、私のホームページを開けてくれました。そして、鳴海英吉の詩の英訳を立ち上げてくれたのです。インターネットでラスベガスから、彼の詩が英語できれいに立ち上がりました！ 彼女、「素晴らしい、素晴らしい」と誉めてくれました。ついでながら申し上げますと、彼女、生まれはアメリカ、ハーバード大卒のホワイトの女流詩人ですが、台湾籍なのです。すなわち、亡くなった御主人が中国人だった(戦前は、ゆえに、日本籍?)ということです。御主人が亡くなったあと、当時十六歳だった息子さんを一人で育て上げ、現在は台湾の大学の英語の教授をしています。息子さんは今はカナダ国籍で、カナダに住んでおられるとのこと。彼女、エズラ・パウンドが卒論だったそうです。エズラ・パウンドは東洋文学に興味を持ち、英語への紹介に努めた詩人です。日本人の多くは単一国籍認識で、彼女の場合のように、複数の国籍アイデンティティは理解しにくいかもしれません。でも、海外では、多元的アイデンティティは、むしろ普通、常識です。

マイノリティとフリンジの問題、それからインターナショナル的なアイデンティティの問題の中で、鳴海英吉の詩の中にも見る、痛み、汚さ | 人間の汚さ、戦争の汚さ\_それら、歴史に囲まれる人間の悲哀とでもいうものを、日本人、アジア人のアイデンティティとして立ち上げて行く、それがインターナショナルリティではないか。日本では、今まで、西洋の文化をもっぱら志向し、止揚する。西洋の服を着て歩く。西歐への、一方通行の熱いラヴ。それがインターナショナルだと、今まで恐らく、考えられて来たのではないのでしょうか。ところが、これからはそうではなくなるということは、日本では私の学者の理論に過ぎなかった、マイノリティとフリンジ、ポストモダニズムとポストコロニアルの批評理論が、われわれの場合よりかなり定着しているということであると思います。日本では、これから拮抗しようということですね。それで、日本でもこの頃、在日韓国系の詩人の詩集とか出始めましたし、出ていますね。それで、その点で、鳴海英吉の詩というのは、マイノリティ、フリンジ、ポストモダニズム、ポストコロニアル、日本におけるアジアの問題、戦争責任、それから非西歐ですね、そのような点で、ポストモダニズムは既に彼の中に入っていたのではないか。そこには「列島」の問題もあります。「列島」の中でも、フランス系の芸術理論と、木島始さんあたりの英語圏の文化との関連がどうもうまく行かなかったようですね。でも、専門的な研究者の立場から見ると、鳴海英吉は、その点によく理解していて、「列島」がそもそも初めから、ポストモダニズム、ポストコロニアル的な立場を取り込んでいたのではないかと思います。それがやはり、いろいろな事情で、もう一度我々が変わらなくてはいけない、ということになったのではないのでしょうか。ということ、私の考えでは、エリオットの『荒地』の影響が、二回来ってしまったのですね、「詩と詩論」の段階と、戦後の詩誌の場合の「荒地」と。結局、そのお陰

で、三十年、日本は英米、世界の中心的詩論から外れたのです。三十年。英米ではモダニズムから脱したところに、日本ではモダニズムが始められてしまったのです。そのお陰で、私も含めて、日本のアカデミズムはいまだモダニズムから抜け出せません。でも、これは、国際的な舞台ではもう通じません。ハーヴァード大学ですら、もっと斬新な行き方をしています。

それであと一つの「演歌的叙情」という問題も、結局、今の段階では、日本の今のモダニズム、形骸化したアカデミズムの中では、やはり少し抑えられているふうな「歌う」ということ、まずそう考えられると思います。歌う。心を歌う。ギターなど楽器と共に歌うこと。これは同じクロスでの経験ですが、一日の会議が終わったあと、みんなでベランダへ出て、詩の朗読会をやりました。ジンカテキーラを飲みながら、です。ギターの伴奏もときどき付きました。参加者は、スペイン語圏の詩人が多かったのですが、彼女たちに聞くと、彼らはこのような朗読会を年中やっているとのことなのです。私たちも、ギターや三味線付きの詩の朗読をしたりしていますが、いまだ一種の前衛的な試みとしてやっているわけです。向こうでは、日常茶飯事に年中やっているとのこと、やはりこれは、スペイン語圏、外国の文化圏との、カルチャー・ギャップの一つと思いました。我が国でもパロールとかエクリチュールとか言われますけれども、そこではやはり、書かれるものとしての詩、エクリチュールのみを重んじて来た、日本のいわゆる詩の状況があるわけで、それは既にアメリカでは、一九五〇年代にいわゆるビート詩人が認識、実践活動と化しています。だから今、私がやっていることは、一九五〇年代初めからビート詩人が試みたことをもう一度繰り返しているようなものなのです。ゆえに、演歌というのは、はっきり申し上げて、ビート詩人のバラッド、黒人霊歌との呼応です。それから、プレヒトの「三文オペラ」。木島始がプレヒトの詩集を、野村修の訳で再版しました。「三文オペラ」は、下層の人間のバラッド(俗謡)を使用した、庶民的、権力にたてつくオペラです。「三文オペラ」の種本は、イギリスのリッチという人の書いた「ベグガーズ・オペラ」、すなわち「乞食オペラ」です。プレヒトという人は、彼自身はハイ・ソサエティなのですが、乞食、娼婦、そういう庶民の歌を、庶民性、風刺と笑い、バラッド・オペラとして立ち上げたのです。鳴海英吉の演歌的叙情については、ビート詩人における黒人霊歌、プレヒトのバラッドの使用がまず私の中にありました。それから、第三の連想として、日本の短歌です。それも、お上品の短歌ではなく、いわゆる狂歌的、あるいは『梁塵秘抄』のような、バラッドとの連想です。庶民的バラッドへの着目は、既に日本でも、『梁塵秘抄』の中にあるわけです。それをやはり鳴海英吉は、詩の中で叙情として取り入れていると思います、庶民的叙情、あるいは風刺的叙情として。

この頃私、国際的な詩の会議に出始めましたが、そのようなところに始めますと、鳴海さんの、アジアへの視点、アジアへの戦争責任、謝罪の問題というのは、否応なく出て来るのです。結局は、日本のアジアへの戦争責任がどうのと、英語ではっきりと言わなければならない場合も出て来ます。世界的な詩人の会では、モダニズム一本槍では、はっきり言って、もうダメです。国内ではまだ大きな顔をしていられますが、海外ではカルチャー・ギャップで、聞いてもらえません。そういう時、かつて二つの機会、私は短歌を詠みました。特に韓国の詩人の方々は、喜んで下さったような気がします。短歌を、日本は長らく、新体詩のもとに、現代詩から除外して来ました、西欧の文化の一方的な止場のために。ですが、短歌的叙情、特に古典短歌の叙情は、『梁塵秘抄』も含めて、アジアの叙情と共通点を持っています。日本の近代は、一時、アジアを見捨てたのではないのでしょうか。

今、全体的に、鳴海英吉の声を思い出すことが必要でしょう。自分の痛みを叩き付ける、人間の汚さを叩き付ける、戦争責任を叩き付ける、高らかに、歌う、アジアという広い展望の中で。その痛みの歌が、鳴海さんの場合、柴田さんがおっしゃったように、個の痛みではなくて、他者の、共同体の痛みにも拡がって行くわけです。鳴海英吉の詩の基本、アジアへの祈りともいうものを明確に引き継

がない限り、日本はこれから国際的に評価されないし、存在を認めてもらえないと思います。それが現在、我々にとってのインターナショナルイズム、国際性だと思います。最後に繰り返します。ラスベガスのインターネット・カフェで、鳴海英吉の詩、英語できれいに立ち上がりました！ ホワイト、生まれはアメリカで故夫君が中国人、国籍は台湾で卒論がエズラ・パウンドの詩人、私の友だちですが、彼女が素晴らしいと誉めてくれました！

ありがとうございました。

—質疑応答—

尾内達也 ちょっと質問していいですか？ 簡単なことなのですが、モダニズムの詩人とポストモダニズムの詩人というのは、具体的に言ってどこがどのように違いますか？

水崎野里子 モダニズムの詩人というのは、英語圏で言えば、T・Sエリオット、ジェイムズ・ジョイス、W・B・イヤーツなどです。特色は、難解性、西洋性、都市性。

尾内達也 西洋性というのは、世界が西洋を中心に回っているという世界観ですか？

水崎野里子 そうそう、そうです……いや、西洋が上だという感覚。

尾内達也 ああ、上位にあるということですか？

水崎野里子 上位にあるということ。黄色とか黒よりもはるかに上ということ。ホワイト性、これはマジョリティ。(以下板書)一九二〇年代中心。フランスのシュールも入ります。日本では十年遅れ、一九三〇年代から、彼らに影響を受けた詩人たちはです。

尾内達也 シュールリアリズム？

水崎野里子 そう。シュールにもいろいろあるのです。モダニズム的シュールからポストモダニズム的シュールへの移行があるのです。それでね、ホワイト、マジョリティでしょ？ それから、マイノリティ。(以下板書)マイノリティというのは、黒、黄色、褐色——非ホワイト、非ヨーロッパ。メキシコ、南米、アイルランド、アジア、アフリカ。旧植民地、非圧迫国。マジョリティは、旧植民地宗主国。だから日本はどちらに入るかと言うと、実は両方に入るのです。アジアの国々、韓国や中国に対しては植民地宗主国、支配国でしたから。でも、戦後アメリカに占領されています、特に沖縄は戦後二十年間。だから、両方。私が言っているのは、マジョリティの気分でしたら、二十一世紀、日本の文化は共に沈没するという事です。でも、みんなわからないのよ。

尾内達也 もう一点だけ質問します。そのモダニズムの詩人たちというのは、自分たちの内部に批判性というのは全く持ち得なかったのですか？ 要するに自分たちが宗主国だというような内省は全く無かったのですか？

水崎野里子 イギリスにはありましたね。でも、イギリスに対して。イギリスはアイルランド独立志願でしたから。だけど、T・Sエリオットとジョイスにはないですね。だって、エリオットはアメリカからイギリスへ移住してしまう。アメリカは植民地で嫌で、宗主国へ行ってしまう。そのあと、一九五〇年代以降、その反動の流れが出て来たわけで、それをまずはっきり言ったのは、シェイマス・ヒーニーです。彼がマイノリティとフリンジの文学を代弁して文章にしてくれたから、私たちもああ思うわけです。それから、メキシコのオクタビオ・パス、ボルヘスやガルシア・マルケスなど、南米のスペイン語圏の詩人たちも、マイノリティとフリンジ、独立と解放の視点から、新たに読み直すべきだと思います。

鈴木比佐雄 よろしいですか？ ところで柴田さんは、鳴海さんがものすごく評価していた詩人なんです。私はしょっちゅう鳴海さんのところに酒を飲みに行っているんなら詩人の話を、鳴海さんから特別いろいろ聞いて非常に高く評価していました。その詩人からきょう、特に下級兵士の視点と靖国の問題を含めて、私は鳴海さんの『銃の来歴』というのは、「戦場詩」という言葉を使ったんですけどね、やはり戦場の生身の肉体を使って殺し合った兵士たちの状況をそのまま書いて、そしてその中でほんとは数秒の間に殺すか殺されるかというところを書き残したんですよね。そういうような意味で鳴海さんの『銃の来歴』というものを一九九〇年に発表したとき、実は鳴海さんは私が詩集にしたらいんじゃないかと勧めたこともあって四冊目の詩集にしたんです。でも配ったらほとんど理解されなくて、途中で配るのをやめて、もうそれを最後は破棄しようとしたんじゃないでしょうか。それくらい何か「もう自分のやっていることは通じないな」と思ったんじゃないでしょうか。亡くなられたあとと処分した

のかなと思っていたのですが、鳴海さんの書齋の本の整理をした時に出てきて、大掛史子さんがもらって欲しい方に配ったと思いますけど。——そういうことがありました。

あと、いま水崎さんは「荒地」のモダニズムが二回来たから日本は三十年遅れたということを言葉ではやんわり言っていました、それはそうだったかも知れませんね。鳴海さんのやったことは「列島」の流れの中にあっただけです。アジアと民衆の視点というのがあって。それはそれで、でもただ「列島」というのは誤解されてしまって、マルキストだということでちょっとイデオロギー的に見られたけど、実はアジアと民衆の視点というのはすごく重要な問題を孕んでいました。ちょうど朝鮮戦争の危機意識であの雑誌ができたのですが、そういう意味では柴田さんの参加している「詩人会議」もそうだし、私の「COAL SACK」もそうなんですけど、やはり「列島」の提起した本質的な部分を引き継いでいると思うんです。それを私はやはり痛感しますし、今後もそういうことを大事にしてやっていきたいと思います。お二人共どうもありがとうございました。(拍手)

## ◎第二部 スピーチと鳴海英吉の詩を朗読

岸本マチ子、玉川侑香、葛原りょう、岩下夏、  
李美子、尾内達也、遠山信男、鈴木文子

大掛史子 それでは、第二部のスピーチ・朗読に入らせていただきます。今日でははるばると遠方からお見えの方が、沖縄からの岸本さんとか神戸からの玉川さん、宮崎からの本多寿さんとか、もうはるか彼方から駆けつけて下さった方がたくさんいらっしゃいまして、ほんとうにありがたいことでございます。

第二部のトップバッターは岸本マチ子さんをお願いいたします。岸本さんは「鮫」のご同人でいらっしゃいまして、詩集に『ヒミコ』『花でいご』などがあります。それで鳴海さんは、岸本さんの人間性と作品を非常に愛されて、もう「マツちゃん、マツちゃん」というふうに可愛がっていらっしゃいました。岸本さん、お願いいたします。

### 1 岸本マチ子

皆さまこんにちは。沖縄から参りました。では、鳴海さんの詩を朗読させていただきます。

ただいま柴田さんと水崎さんのお話を伺いしておりましたら、わたくしがよく存じ上げている鳴海さんじゃないような(笑)非常に立派すぎて、「えー!？」と思うような、非常に立派な鳴海さんになってしまっていて、瞬間、「お人違いじゃないかな？」というような(笑)感じがしたんですが。

わたくしは実は鳴海さんとはわりと仲良くしていただきまして、「俺はそんな善人じゃねえんだよなあ」なんていうようなことをざっくばらんにいつもおっしゃっているようなお人柄でした。それで鳴海さんの何というか「立派な詩」というのではなくて、もっと砕けた、非常に……多分これは皆さんはあまり読んでいらっしゃらないかなあーと思うような詩を読ませていただきます。「結婚について」という詩なんです。

#### 結婚について

この御時世で豪華な結婚式をする奴は

ロクな奴はいねえ と俺は云う

だから 俺たちの結婚には

一級酒三本位でも足りそうだ

ツマミはいらない

三尺×四尺の食卓を作ってくれた木工屋

塗装の仲間が 脚を赤く表面は黒で塗装する

板金屋は 自動車の古い車体のニューム板で

叩き出して 丸められて鍋と釜になる

つまり不恰好でも堅実サで一代モノだ  
腹にまかれて 背中にぶら下げられて  
工場から持ち出された

結婚について

俺の持論ではこうだ  
第一にこの給料では食える訳がないと  
昔 おれが今のバアさんと一緒になったとき たった五円しかなかった  
いくら物価が安いときでも  
たったの五円ぢゃあ一米の一升も買えない  
それでも おれらは一緒になったものサ  
以来 この年になるまでアレと一緒にだ  
一人グチは食えねえが  
二人だと食える 所帯テのは不思議サ

仲間の持ちこんできた火箸だの釜だの鍋だの

へへッ！すべて盗品なのである  
厳密に云うと そうなのである  
けれど この不恰好な盗品は素晴らしい  
そんな勇気をおれは これから持とう  
俺は 胸のなかが一弁になっている  
気持のいい水のように美味しい  
ガラクタなこの部屋は貧しくて  
なんにもないけれど  
箸一本から揃えようナと 嫁さんに云う  
そのとき 百三十五円ふところにある……

——という彼の「結婚について」という詩なんですけど、ほんとうにこれには生活的実感が充滿していて、ああそうなんだろうなあーというふうに思えます。ある意味ではたいへん稚拙な、という感じがしますが、これこそ本物の詩なんだろうなという気も……皆さん、しませんか？(笑)そういうようなことで、わたくしはきょう山之口獺の詩も一つ、獺さんの詩に同じ「結婚」というのがあるんですが、それもちょっと読ませていただきます。それで、獺さんと鳴海さんがどういうふうに似ていたか、ちょっとその比較をさせていこうと思っています。これは山之口獺の「結婚」という詩です。

結婚

詩は僕を見ると  
結婚々と鳴きつづけた  
おもふにその頃の僕ときたら  
はなはだしく結婚したくなつてみた  
言はば  
雨に濡れた場合  
風に吹かれた場合  
死にたくなつた場合などこの世にいろいろの場合があつたにしても  
そこに自分がある場合には  
結婚のことを忘れることが出来なかつた  
詩はいつもはつらつと  
僕のゐる所至る所につきまといつて来て

結婚々と鳴いてみた

僕はとうとう結婚してしまつたが

詩はとんと泣かなくなつた

いまでは詩とはちがつた物があつて

時々僕の胸をかきむしつては

筆筒の陰にしやがんだりして

おかねが

おかねがと泣き出すんだ。

——という、同じ「結婚」を取り扱ったこれは獏さんの詩です。このお二方の詩を見ていると、生活派詩人という言葉がなんか浮かんでくるような気がするんです。そういうふうにとまどめてしまうというのはあまり良いことではないと思うんですが、つまり生活的時間が充満しているという意味です。それで、獏さんもそして鳴海さんもお金にはあまり縁がなかったんじゃないかなあと思うんですが、特に獏さんの場合、沖縄出身ということで青雲の志を抱いて日本へやって来たのに、あの当時昭和十年前後日本は不況で、ものすごく不況で、「朝鮮、沖縄お断り」という張り板が出されるくらいに差別されていたわけです。ですから、彼はどこにも就職ができなかった。そして汚穢屋さんになつたりいろんな仕事に就いて、ようやく彼はこの結婚をして奥さんを貰つたとたんに、温灸器という訪問販売の会社にいたのにその会社が潰れてしまつて、それで無一文になって、また夫婦して——鳴海さんは「一人グチは食えないが二人グチは食える」というようなことをここに書いていましたけれども、獏さんは一人グチも二人グチもとつても食べられなかった。そして毎年大晦日になると、獏さんはラジオに出演して「貧乏物語」を(笑)やって糊口をしのいだというような、そういう方だったわけです。それで、そういう獏さんも戦争の詩を一篇も書いてない。ですから鳴海さんも、鳴海さんと同じに、例えば一般的に「反戦論者」なんていうことを言いますけれども、そういうふうにはイデオロギーなどというちやちなもので反戦だったのではなく、ほんとうに生きる、人間として生きる最低の線から出た反戦だった——ということだと思ふんです。「人間の本心」という意味での反戦。ですから、獏さんが書いた反戦詩の中でこれは素晴らしいと思ったのに「ねずみ」という詩があった。こういう詩や、それからラーゲリの詩を書いた鳴海さんの詩にしても、非常に強いわけです。吹けば飛ぶようなイデオロギーで書いた反戦詩とは違ふわけです。そういう人間の本质から出た言葉というものはとつても強いと思つて、それで、鳴海さんと獏さんは何てよく似ているんだろう……。

もう一つよく似ている意味で、獏さんとはつてもお金に困つて、もう片っ端から——親から親を食べ、兄弟を食べ、いろんな人を食べ尽くしたつて。「俺は食人種だ」なんていうような詩もあるんですが、もう片っ端から借金して歩くような人だったわけです。つまり、周りにそういう温かい人がたくさんいたということだと思ふんですが、それと、鳴海さんは自分の腕一本で、彼は非常に優秀な板金工だったと思ふんです。もう彼の爪を見ると、みんな割れているんですよ。「オレの手見てみる、こんなだよ」なんて見せたんですが、「握手しましょう」と言うと「いや、オレの手はアレだから…」なんて恥ずかしがつて握手しないというような方でしたけれども、そのくらいに手を酷使した方でした。つまり、裸一本で両方とも恥を忍んで借金したり、裸一本でその腕一本で生活をしたりという人たちだったのにもかかわらず、獏さんはあるとき「コーヒーおごるよ」——おつしやつたんです。沖縄に来た時に。「講演会でドルがいっぱい入つたから。初めて僕はこんなに札束を持ったんだよ！ 震えるんだよ！」なんていうのに、講演会でいっぱいお金が集まつてもう嬉しくて嬉しくて「コーヒーおごるよ！」——獏さんにたった一度コーヒーをおごってもらつたことがありました。その時の獏さん、「ケーキもいいんだよ、ケーキ食べな！」(笑)。もうほんとに嬉しそうでした。やっぱり男の人は優しいですね。そして鳴海さんからも、驚いたことに、あるときわたしは「何が好きだい？」「私はおうどんが好きなんです」「そうか、じゃあ きつねうどんをおごつてやるよ」——たった一度きつねうどんをおごつてもらいました。困つていてお金が無いのにもかかわらず、「女におごりたい」という男の切ない気持、これはねえ、すごいなあー！ ……なんか、泣けてきますよ。(一同笑い)そういう男の人はわたくし、大好きです。だからあのコーヒーの味も、きつねうどんの味も、わたしは忘れません、一生。とつても美味しかったです。それがあの二人の男の味だと思っています。どうもありがとうございました。(一同拍手)

大掛史子 どうもありがとうございました。鳴海さんがあの世から大変喜んでいらっしゃるようなスピ  
ーチ・朗読でございました。

次も、やはり遠くからいらっしゃってくださいました玉川侑香さん。お願いいたします。

玉川さんは「詩人会議」に所属していらっしゃいまして、「文芸・日女路」を発行していらっしゃいま  
す。鳴海さんが生前から「自分の資料は全部神戸の侑香さんのところにあるから、そこに行けばもう  
全部揃うんだから」って遺言していましたような方で、そのお陰で『全詩集』も作ることができました。  
最近、詩集『かなしみ祭り』を発行されまして、たいへん好評の詩集でございます。

## 2 玉川侑香

神戸から来ました玉川侑香といいます。いま岸本さんからも庶民的な鳴海さんの話がいろいろ出  
ましたが、私ももうほんとに鳴海さんといえば、飲んで、それでもうすぐに「ああかなわん、電話が掛か  
ってくる」という鳴海さんでした。東京へ出てくるたびにいつもお酒を飲んだんですが、おごってもらっ  
たか割り勘だったか、ちょっと今のところ記憶がないです(笑)。一番思い出があるのは、私が詩集を  
出したいというのでたくさん詩を鳴海さんに送りまして、そのことでまたお酒を飲みながら意見を聞いて。  
もうその時にはボロボロに言われましてね。「よくこんなモノで詩集を出すというもんだ。もう俺と  
こへ持って来て俺が出すと言うまで詩集なんか出すな！」ってもうすごく怒鳴られて、その一杯飲み  
屋さんで私は情なくてボロボロ、ボロボロ泣いたんですね。それでなんか涙が止まらなくて。そしたら  
店の女将さんがチラッ、チラッとこっちを見てるんですよ。どうなんだ？ 親子喧嘩でもなく……男と女  
の別れ話なのか？(笑)というね、その女将さんの非常に複雑な視線を受けながら、涙が止まらな  
かったというのを覚えています。まあそんな鳴海さんで、いつも私が一番忙しい時間に電話が掛かって  
きましたね、ときどき娘に留守守を使わせてはまた後で電話が掛かって来るという。けど、そんな鳴  
海さんの最期に立ち合うことができなくて、今この古い写真を取り出してきて鈴木文子さんと言ってい  
たのですが、なんか私、これを見るだけでちょっと涙が出てきそうなんですけど……。鳴海さんは酔え  
ば酔うほどね、すごく精神が透明になっていく方だったと思います。私はこの『ナホトカ集結地にて』の  
中にあります「雪」というシリーズがすごく好きで、その中から「雪〈2〉」というのを読ませていただき  
たいと思います。

### 雪〈2〉

それでいい 放り出してきていい  
抱きおこさなくていい 雪を払わないでくれ  
このままにして おいてくれていいんだ  
知らん顔をして立ち去れ おれは呼ばない  
雪が背中の上に ふりこめる  
それで終ろう

点呼のとき一人不足だと騒がなくていい  
雪原に置き忘れてきた  
間ぬけ話をみんなで笑い合おう  
明日 雪原のどこかへ 白樺の小枝をたてる  
それでいい むずかしいお経 いらない

この枕木一本一本が 死んだ兵士たち  
奥地に切り拓かれてゆき雑木林が深くなる  
そのたびに枕木が増えつづける  
ふらりと何百の枕木が立ち上り  
手を生やし 足を生やし ヒゲを生やし  
肩をおとし 挨拶もしないで  
雪明りの白い道を列を組んで立ち去る  
シベリヤ鴉 があッぎやあー  
どこへよろめいて去ったか

雪 静かにふりこめよ やさしいかたち  
背中からきしきしという重さで  
きしきしという背骨の軋みで  
今は耐えられないほど寂しいから  
思わず念仏する 沈んでゆくおれに  
上ずって 念仏  
赤ん坊のときのように 手と足を曲げ  
一かきの雪を胸にかきあつめて  
いのちのように暖め合おう  
まだなにか おれはいらだっている  
おい死ぬときぐらい おれにきめさせてくれ  
念仏

生まれたところに帰れるだろうか  
春になったら 生まれたところに帰ろう  
この湿原には シベリヤあやめが  
細い紫色の花弁を東の方に向け  
ふるふる 首をふって一面に咲く  
その春がくるまで死んでいよう  
これでいいんだ わめき疲れた  
これでいい  
今は おれすらいなくていいんだ  
時間が消してしまう どっちでもいい  
ただ しんしんと ふっていれば それでいい  
始めから なにもなかった

……(一同拍手)……

大掛史子 素晴らしいご朗読で、雪の世界が再現されました。ありがとうございました。

次は、ぐっと若い方で葛原りょうさん。この方は一九七八年生まれ、二十七歳という方です。「詩人会議」「詩と創造」などの会員でいらっしやいまして、「衣」の同人でいらっしやいます。「COAL SAC K」にも最近もう積極的に寄稿されていらっしやいまして、詩、俳句、短歌、小説、エッセーなど非常にたくさんの作品を生み出していらっしやいます。様々な受賞もなさっていて、最近では「詩と創造」

奨励賞を受けられました。第一詩集の『朝のワーク』をいま作っていらっしゃる最中で、もうすぐできるということです。あと、ちょっと扁桃腺で体調が悪いみたいですが、ご朗読はもう素晴らしい方ですので、皆さん楽しみに聴いてください。よろしく願いいたします。

### 3 葛原りょう

ちょっと先々週から喘息と風邪を引いてしましまして……。

鳴海英吉さんの詩を私は非常に大好きで、私がもう少し二十歳、三十歳年上になっていてまだ鳴海さんが生きていたら、一緒にお酒が飲めただろうなって、ほんとに思います。今のままで飲んでたら多分、私の方から喧嘩を売っちゃうんじゃないかと(笑)思いますし、鳴海英吉さんは、武力也さんという私のよく知っていた詩人で亡くなったんですが、武力也さんみたいな人だなとか——なんか同じ板金工とかね、やっていたり。前回、武力也さんが鳴海英吉さんの朗読をされたということみたいで、それを聴きたかったなと今でも残念です。私は今回が初めてですので……。じゃあ、詩の朗読をさせてください。

れき死について

……犬のように殺されて……

カフカ

遅刻すると今日こそ大変だ ぼくは遮断機の下りた踏切を ぐり抜けた 吸いこまれるような打撃と 踏切警手の叫び声が どこか遠くでホイッスルのようにだった ぼくは今日遅刻すると大変なのだ 昨日の朝 社長の訓辞があったばかりだ この不況下で生き抜くために 一分でも二分でも出社して仕事をすべきである だからぼくはそんな変な音や打撃に関っていられないから どんどん走って 予定の国電に駆けこんだ

座席に坐ったら隣でスポーツ新聞を掲げていた男がぼくの方を叩く“失礼ですが 貴方は首がありませんが”“やあどうも 冗談が上手い人だ” お辞儀をしようとしたら 首が本当にない “なあーに 首の一つや二つなくなつて あんた 首切りには馴れてます” おやっ言葉が出てこない 首がないから あいつ！首なしで乗車してる ざわめきが怒鳴り声に変わったらしいが 耳がないから聞こえない “あんたあー首がないで乗車しては困るんだな 他の皆さんの迷惑 次の駅でお降り下さい！”車掌にこずかれ 手荷物のように駅に放り出されるとぼくは初めて知った 国電は 定期券はあっても首がないと 乗車拒否をする

ぼくは仕方がないから 発車駅まで引き返す もう会社には間に合いそうにもない 怒鳴るだろう人事課長 “なんだあー首を忘れてとりに帰る？君はいつもうっかりしてるからだ ポケットの中に入れて忘れてのどちがうのかッ！そんなことが欠勤の理由になるかあー君!!” さて ぼくの有給休暇は何日残っているか 皆勤手当はどうなるのだろう 首がないから だらりと下げた指先で考える 踏切近くで救急車がシュラシュラポツポツというサイレンを鳴らして停車していた “あんたかね 朝パラから首を忘れたのは！” 救急車の掛員は怒鳴りちらしている ぼくは怒鳴られると幼児の記憶がよみがえる 記憶というものは遠い日々ほど早くよみがえるのは何故だろう ぼくは年中怒鳴られ放して一生を終るかも知れない 首がないから その時 涙も出ない！

ぼくは ぼくの首を急いで拾わなければならないと駆け出したが まったく方向がわからない 小石につきとばされて ころげてしまうのだ どっと四方を取り巻く群衆は笑いずれる ぼくは突然犬のように匍うことを知った 首のところへ手さぐりで辿りつこうとすると 誰かがフットボールのように ぼくの首を蹴りあげた 首には口があるから わあーと悲鳴をあげて群衆の頭の上をとびあがる 胴体だけのぼくは手を思い切りのばし 首を受けようとするが 群衆の沢山の手から首が運ばれ 足で蹴られるから 首はわめき うめいていたが “にんげんが恐いよう……”と泣きはじめていた

群衆が去り ぼくはぼくの首を胴体に乗せると ごくごとと首と胴体に同じ血が流れ合う ぼくの首はボクサーのように ひしゃげ 傷付き はれあがっても ぼくのものだ温いなみだが ぼくのほほを流れてくる“こんなことなら 本当に死にたい！”どうしたとか目の前に白い霧のようなものが深くなる

その深くなってゆく霧のようなものの向うでぼんやりと見えてきたのは 医者と坊主が 深々と頭を下  
げていた

## 流沙

ゆうべ おれは流沙の音を聞いた  
さらさら 庵の屋根を叩き流れ果てた  
死んでかたくなった男たちが  
中国の黄土の中から巻き上げられて  
あふーう あふーう 叫びながら  
馳けつづけてきた 流沙の音を聞いた  
おれは掌を拵げないでいる  
おれが掌を拵げないのは  
そのうめきまで 受け切れないからだ  
さらさら こぼれて  
なにも残らない  
なにも残らないはずのもので  
おれの全身がくびられるようになり  
つきささってくるから  
おれの唇はなにかが白く乾いてくる  
人を殺せよう一皆んな殺してしまえ

殺したいようー  
確かに おれはおまえたちがうめくように  
呪いつづけるように  
もっと にんげん を殺すべきであった  
ぼうぼうと村落を炎のなかに沈め  
逃げてくるにんげんを 射ちまくり  
そして 遁れられないまま死ぬべきであった  
おれもおまえも鬼にしかなれぬ  
あふーう あふーう と叫びながら  
この巻き上る黄塵のなかをとび  
ダットン海峡を  
一瞬に 馳けるべきであった  
暗い海の上では 粉骨は白く見えるか  
おれたちは そうした搬ばれ方で  
さらさら流れ果てなければならぬ

そつと誰かに出合うために  
夜ふけてから 堂のみ仏の前に坐る  
列を組んでふきあふれている  
流沙の 衰しいまでのとうめいな叫びは  
もっと遠くに流れ果てるのか  
おれはその悲しさに耐えるために坐る  
おまえたちは  
おれがまだ生きていることを許さない  
許そうとしないで叫びつづけている  
堂のなかにひとつの燭台の灯

じいじいと燃えてゆくときの一瞬に  
明るくゆらめいて 修羅をみせた  
所詮は おれもおまえも鬼にしかなれない  
み仏 今は黙し坐し語るな  
なにもないものの形  
なにもないものの宿業  
を みるために おれは坐りつづけている  
み仏よ おれは許されたくはないが  
このように合掌している  
おれが許されてたまるものか  
まるいまるい 顔のひとつもない  
無量の白い流沙たちが群れて  
あふーう あふーう と呼び合う  
み仏の衣紋線の裾に流れてくるが  
おれは指で そっと拭ってみる  
なにもふれるものがなかった  
なにもないのだが  
確かにおれは  
さらさら 流れる流沙の音を聞いた

烈しい風の吹き去ってあとは雨  
白く山中の庵室を包んでふりこめている  
おれは今朝も早立ちする へんろ  
ゆうべの烈しい風で白い椿が落ちた  
沢山の白い椿の花の下に埋もれたへんろ道  
夜明けの雨は静かに打ちつづけているから  
これからは おれは濡れながら  
ひとりで歩くことになる  
同行二人と書かれた笠が  
もうひとりの人間のように奇妙に重いが  
それでも歩くことになる

……(一同拍手)……

大掛史子 鳴海さんが生き返って(笑)葛原さんに乗り移っているような感じですね。とても迫真力のある朗読のなさり方でしたね。

葛原りょう そうですか？ 鳴海さんの朗読を聴きたかった！

大掛史子 こういう若い方々に鳴海さんの詩を継承していただきたいというのも私共が全詩集を出した一つの目的でもありましたので、大変貴重な存在だと思います。これからよろしく願いたします。(一同拍手)

次はちょっと遠くの栃木県からいらして下さいました岩下夏さん、願いたします。「衣」同人で「COAL SACK」にも積極的に寄稿していらっしゃいます。詩集『さまよい雀』で「詩と創造」奨励賞をお受けになりました。鳴海英吉に積極的に向き合っています。よろしく願いたします。

#### 4 岩下夏

私が初めて鳴海さんを知ったのは、昨年見せていただいた「COAL SACK」での特集だったと思います。ふさ子さんの詩を読んで、何と言いますか男性が女性に感じる愛情というよりは、もう無償の愛というか親が子に注ぐような深い愛情を感じました。それですごく興味を持って詩集の方を購入させていただいたんですけれども、やはりナホトカの詩集を見て衝撃を受けました。やっぱり戦争とか何とかということになると、皆さん酷い体験をされた方は言いたくない。それで体験してきた方は言うんですが、必ず「時代が悪かった」とか「俺が悪かったわけじゃない」ということを付け加えるんですけれども、それが何となく私たちみたいに戦争を知らない世代には「戦争はいけません」「戦士たちは一生懸命戦って、苦しみながら死んでいきました」|| そういうふうにしかならなかつたような部分があると思うのですが、鳴海さんの詩はとても、今テレビでけっこう残酷な描写みたいなものがありますけれども、そういう感じのそのままのものをぶつけられたような感じがいたしました。すみません、今日は戦争詩みたいな感じで「友」という作品と、あともう一つ一生懸命誇りをもって生きた生活人としての職人さんみたいな詩が大好きというか、「裏声で あいさつ」という二篇を朗読させていただきます。

#### 友

みんなで あいつは死ねばいいと思っていた  
おれも死ねばいいと  
いつ死ぬのかと楽しみにしている  
寝台から骨に皮をつけた細い腕をたらし  
夕食の黒パンの切り方は 左の方が大きい  
腕をふらりふらりゆすって毎日抗議する  
不当な行為は 神が許しません  
うるせい生きぐされ 神も仏もあるものか  
生きられる者が 生きてりゃあいい

骨のまあい握りこぶしをふり  
トリ目でもパンの大小は判る  
見えないものが見えるのは 神の摂理です  
イエスキリストを信じなさい

死んだとき すっぱだかにして  
雪の上に放り出しておいた  
所持品のボロは 御世話料として分配する  
家族らしい一族の写真も破って捨てた  
おれは飯ごうを手に入れ  
ポコポコと調子よく叩いてみた  
死んだあいつが うす眼をあける  
食いたそうな眼をしているのが  
灰白い雪の照り返しで きらりと光った  
おれはこいつは死ねばいいと思っていた  
迷ったかあ！  
防寒靴で雪をけとばし  
あけ放して光る眼にかけ  
なむあみだぶつ ただの念仏を唱えてやった

墓地にあいつの死体を運ぶ  
ぎゅーうぎゅーう 大八車が軋んで泣く  
凍って固くなったあいつをつかんで  
墓のなかに投げ入れる  
まず墓穴のまわりの雪がくずれ落ちる  
またも雪が……  
ふっと讚美歌で奴知ってるか と聞いてみた  
みんなそんなものは知らんと不機嫌だった  
不正な行為は神が許しません  
イエスキリストを信じなさい  
腕をゆさゆさ揺って 雪をふらし始める

裏声で あいさつ

今日はずぐもりだから 明日は雨  
そんな ありふれた あいさつでいい  
いつものように じゃあナ  
スコップの泥を そぎ落とし  
鉛管も束ねてしまった  
もう忘れ物はない  
ならば 材料置場の電灯を消す

スコップで 掘り穴をつき崩す 足が痛む  
左の耳が 遠くなり 老眼が合わない  
一瞬体をかわず動作がにぶい  
梁に上げる鉄管を支え上げる 足がもつれる  
物忘れ 手元の工具がない  
三山のあと一山 ねじり込みに 力が入らない

そんな事は 誰にも言わなかったが  
この水道屋の仕事が好き  
じいさん 使っていると 人件費ばかり食う  
ふざけるな かげ口を叩くな  
お情けで 使っていたくほど  
ボケてはいない  
どだい 儲かろうが 損をしようが  
おれの知ったことか  
職人を通した それだけは言うておく

若い時の失業は苦しかった  
もういい 終わった  
家族を養うなんて あきあきした  
これから 死ぬまで生きるから よろしく

水平器の砂をはらう ネジ切り機械を拭う  
タガネに油 ハスリのバリとり  
パイレンのネジを 確かめてみる  
ハンマーを磨く ぎらっとひからせる  
だが 言い切っておく  
ヤナギ刃を ぴちっと とじる  
おまえら 絶対に 錆させはしない  
ねじりはちまきを ゆっくりほどく

——ありがとうございました。(一同拍手)

大掛史子 次は李美子(イ・ミジャ)さんです。この方は「たまたま」同人で「COAL SACK」にも毎号寄稿していらっしゃるようで、『遙かな土手』という詩集で福田正夫賞を受賞されて、その時に鳴海さんは非常に励ましのお手紙を下されたということで鳴海さんとの交流ができたという方でいらっしゃいます。よろしくお願いたします。

## 5 李美子

李美子といいます。鳴海さんとは一度もお会いしたことがないのでお話しする内容もほんとうに貧しいものなのですが、ただ、今日は韓国語で詩を翻訳したものを読んで欲しいというお話だったので、初めてですが挑戦してみました。今までは反対に韓国詩を日本語に訳して同人誌に発表することは何回かやってきました。その逆は初めてなので心配しています。さっきお話しされた水崎さんも「COALSACK」の五二号で「零(ぜろ)」という作品を英訳されて、今さっき読まれたのですが、この「星」はそれに似てるんですね。私は水崎さんがどうして「零(ぜろ)」を、他の作品の中から選び翻訳されたのか、ちょっと分からなかったのですが、私の場合、動機としてはまず「短いこと」(笑)を考えました。長いものは大変だから。——鳴海さんの詩は今までいろんな方が読んできましたけど、長い詩でとても良いものがたくさんありますよね。私は「銃の来歴」がいちばん好きです。その翻訳はとても私の力では無理なので、この『定本 ナホトカ集結地にて』という一九八〇年の詩集から、「星」を訳してみました。先ず日本語で読みます。

## 星

シベリヤでは なにもないものが凍る  
すきとおる空が凍る  
星のくだけたようなものになり  
きらきら ふってくるのである  
木々のからみ合いを切りひらく  
沢山の鳥たちが 群れてとび立ち  
—しゅん どよめいてのあと  
真昼の青空から 星がくだけてふるのである

木の下敷きになって死んだ奴を  
雪の上を ずるずると引いてゆく  
雪の上にはみ出した内蔵を残してゆく  
シベリヤ鴉の餌  
神も仏もあるもんか と吐き捨てる  
だがおれに そのほかに なにがある  
生きていると思うな

生かしていただいているのだ  
ふり返るとなにもなかった  
黙りくねり 長い列  
きらきら ひかりふる 星  
ずると引かれている死  
うすく眼をあけている  
ぼんやりとした 厳寒の前ぶれの  
うづくまった森 真昼  
星が きらきらその空間にふっている

——拙い韓国語ですけど、翻訳したものを讀みます。

(略)

大掛史子 ありがとうございます。鳴海さんの詩がハングルになったもの、ほんとうに画期的なご朗読でございました。

次は、尾内達也さん。尾内さんは詩作のほか英詩の翻訳をしていらっしゃる、「COAL SACK」に毎号出されていらっしゃいます。鳴海さんの詩をブログで紹介していらっしゃいます。最近の訳著に『インターネット時代の表現の自由』というご本がございます。よろしく願いいたします。

## 6 尾内達也

こんにちは。僕は鳴海英吉さんともちろん会ったことはないんですが、『全詩集』が出てから一読させていただいて、非常に強い印象を受けました。先頃、九月に衆議院選挙が行われましたけれど、小泉さんがかなり圧倒的な多数で勝ち、そういう状況で鳴海さんを読むというのはまた違った意味で非常に重要性が出てきたと思います。一つは、戦争が近くなったと思います。テロも含めて戦争が一步近くなってきたという気がしています。もうさらに、郵政民営化に象徴されるように、アメリカを中心にしたグローバリゼーションの中に強く組み込まれてきたなという感じを受けています。

鳴海英吉さんの詩は、讀んだ方は皆さんお感じになられると思いますが、「ナホトカ集結地にて」に象徴されるような極限状況を体験した者の反戦思想という強いものを持っておられます。——そういったもの。それからもう一つ、全体を通して讀んでみますと、俳人の小林一茶に通じるような「命」というものを、人間だけではなくて他のものへも注ぐような、何というのか「トータルな命」というものを大事にするような、そういう思想というか感受性というか、そういうのを感じます。まあそれは多分「不受不施派」というような仏教の一派を研究されたということにも表れているのでしうし、「仏教というのは民主主義だよ」という端的な言葉にも表れています——それは非常に仏教の本質的なところをついていると思って、僕は印象に残っています。

言いたいことはかなりあるのですが、政治演説会じゃないので(笑)このへんでやめさせていただきます。今日は三篇ほど朗読させていただきます。

### 雪〈4〉

言い残すことは なにもないと言う  
本当にないかと聞くと 本当にないと言う  
じゃあ死んでくれ ああ と答えるから  
毛布を頭まで上げてやった  
すうーと氣持よさそうに死ぬのである  
わめきも 泣きもしない  
おまえさんは こんな死に方でよかったのか  
おれだけがブルツと身ぶるいをして  
幕舎の入口でじゃあじゃあ小便をする

幕舎の外は又も雪

おい雪は空からふるなどと 言うな  
烈しく暗い空に向ってふき上るのだ  
誰も信じてくれないから 言うな

雪〈5〉

南無阿弥陀仏

南無阿弥陀仏

なむあみだぶつ なむあみだぶつ

なあみ だぶつ あ あ だぶつ

な あみだぶつ な なあー

あみだ

あみだあ、よう

あみだよう——

な、む、あ、み、だ、ぶ、つ、

よう よう——

う う——

う——

う

砂

ナホトカ港の埠頭で

軍袴を折り返して たまってくる  
ざらざらな砂を 払わないでおこう  
いまおれの肩ごしにふく風が  
砂を背中に流しつづける  
やさしいうなりを聞いた  
砂にしかなれなかったものが  
すでに すべてを言い終ったのか  
おれはふりかえらなくていい  
背中を叩く砂あらしの挨拶は  
うめきながら やさしかった

この砂を祖国の浜にまく

あるはずの石を置く屋根

ぐるりと風見鶏の一めぐり

そのものたちに

拒まれるか 受け入れられるか

おれにはなにも分らないが

死んだ兵士だけ広くなった空に

手を真直にあげて 砂をまこう

掌のなかに わずかに握りしめた砂が

いま死んでゆくときのように 暖かい

こぼれないように 掌を合せると

なむあみだぶつ と合掌のかたちになる

おれはいまから問われてしまった

生きていて いいのか

死のように 生きて行くのか

——ありがとうございました。(一同拍手)

大掛史子 次は、遠山信男さんをお願いいたします。遠山さんはもう鳴海さんとはほんとに長い交流がございまして、鳴海さんは今ご存命でいらっしゃれば八十二歳でいらっしゃるんですけど、遠山さんと同じくらいで……

遠山信男 ええとね、鳴海英吉は私より二歳下です。私はいま八十四歳です。

## 7 遠山信男

昨年は武力也がここで記憶に残る「五月に死んだ ふさ子のために」というのを暗誦でやりましたよね？ 生きておれば今日も素晴らしい暗誦をやったはずですけど、非常に残念です。しかし葛原りょうさんが鳴海の好きだった詩、それから武力也を非常に好きなようですが、武力也の衣鉢を継ぐ存在であろうと思います。

鳴海英吉……まあ私はですね、「鳴海…さん」……とはなかなかね、どうも言えないんですがね。「鳴海さん」(一同笑い)……(笑)「鳴海」とも言えないんですよ。まあ言いやすいのは「鳴海英吉」ですね。「鳴海」というふう呼び捨てにできないんです。ところが鳴海英吉は、私に対してはね、「遠山さん」というのが非常に、……あまりないですね、言いにくそうにして言う場合がありますけどね、まあ「遠山」ですよ。

それで、鳴海という人はどういう人なのかと一口に言いますとね、自分の気持ちに嘘をつくのが大嫌いな男であったんだろうと思います。それで自分の気持ちとたえず闘ったのじゃないかと。何か見聞した場合に「どう感じるか」という時に、やはり体裁をつけて恰好良く表すということを嫌いましたね。やはり民衆の言葉で、自分のそういう姿の中でいちばんピッタリした言葉で、自分の気持ちを言おうと絶えず努力した人であろうと思います。それで「風呂場で浪曲を……」もそうだし、いろんな自分の板金工としての生活ぶりを自分のほんとうの言葉で書こうとしたんだろうと思いますね。やっぱり『ナホトカ集結地にて』も、そういう一環として大成したものである。そういう点で、『ナホトカ集結地にて』を通して鳴海英吉という詩人はもう歴史的な詩人になったと思います。またその歴史的な詩人生が、鈴木比佐雄さんのこういう顕彰によってますますそれが民衆的にも浸透し、確実に鳴海英吉が歴史詩人として飛躍していきだろし、そういうことを希望したいと思います。

それで、さっき(『全詩集』を)パラパラッとめくって、あ、これは面白いなあと思った詩があるんです。「春画」という詩なんです、これを途中から読みます。暗誦でなくて……やっぱり詩の朗読っていうのはいいですね、何も苦労することはありませんよね？ (一同笑い)

### 春画

芸術家って わがままなんだ  
篠竹を 細く割って筆づくり  
レーニンとスターリンの肖像  
とにかく描け 描きまくれ！

建国の父 レーニン 次ののは  
春らんまん ウタマロを描け  
偉大なる スターリン 次は  
ウタマロを 太くして 描け

ウタマロを マダム達に売り付け  
スターリンで 画用紙をピンハネ  
原料は泥棒(サブサラック)する  
黄色がない なんとかする 描け

マダムたち ウタマロ素敵！  
共産党も にやりと 笑う  
嫌いなら 子供を作るなっ  
人間が減びる問題である！

描け 絵描き 煙草マホルカ二個  
芸術の良心 絵描きの真心だって  
芸術に そんなもんがあるもんか  
死に損ないが 言うせりふか！

スターリンは どうでもいいのだ  
ウタマロは 生きろって言うのだ  
一回り太く描くが サインはない  
魂の問題だ まだ 言っている

——まあ素晴らしい詩ですよ。(一同笑い)

それで「火線と凍土」というエッセーがこの『全詩集』の中にありますけれど、その最後に「鶴」という詩があります。これは鳴海英吉の詩集の中では非常にきれいな詩ですよ。非常に洗練されたといえますか、鳴海英吉の詩の中では非常に異質な詩です。それでそれを、まあ……詩を暗誦はしてきただんですけどね、ちょっと、やっぱり、暗誦でやるにも失敗はだめですからね(一同笑い)、読んだ方がいいですよ。こんな年齢でもね、何も遠慮することはありませんよ。

## 鶴

鶴は群れてなぜ帰ってきたのだろう  
鶴はなぜ忘れなくて帰ってきたのだろう  
鶴はなぜ雪だけを信じるのだろう  
鶴が北の方に飛ぶ日は 雪がふる  
鶴が全身をふり羽毛を一本ずつ落としている  
枯れた野菊を焼く早春を包みこんでいる  
包みこまれてきれいに祖国はとうめいになる  
とうめいな雪で ナホトカも薄く白く染まる  
根雪の上ですぐとける 淡雪になる  
鶴は祖国で何を見てきたのだろう  
ぐるーう  
なぜもっと寒い北に 帰るのだろう

——という詩ですね。これについてすぐ一種の始末を鳴海は言っておりますけど、《これが一九四五年(昭和二十年)の一年間の記録です。今、五十年の節目だと言います。この節目は過去の侵略

戦争の大掃除をして新しく戦争体制の準備？ の節目のようです》——すごいことを言ってるね。もう予見してますよ。《過去の歴史を見ても、権力者たちは絶対に政治の責任を取ろうとしません。まして、侵略戦争を聖戦などと言って戦争を美化し、歴史から戦争を消し去る作業を進めているようですが》——今現在そうですね。《戦争の実体は書いたとおりです。／＼戦場に要注意兵として差別？された兵隊でしたから、たった四年の戦争体験を書き、これからもう書き続けてゆくようです。たった四年間を！……。付けたりですが、シベリアの死から(サカロフスカ国立農場)に移り、シベリヤ農民との交流で死から生へ、生き変わるドラマの連作は書き終えています。今はぼうーと考えています。黙って死んでいけばいいのに……。／＼一九四六年(昭和二十一年)正月元旦、支給されたのは、小さなじゃが芋(カトルシカ)三粒だけでした。》——これはもう散文詩ですよ。素晴らしいです。

それで、先ほどの方が鳴海英吉の「南無阿弥陀仏」(雪<4>)を朗読されましたけど、まあ鳴海英吉の詩には南無阿弥陀仏というのは、遍路の詩にも出てきますけど非常に多いですね。南無阿弥陀仏。いつかね、私は鳴海に節回しではどういうふうに言うのか訊けば良かったなあと思ってるんですけど、私が小学校の五年の時に医者(伯父)が死んだときの南無阿弥陀仏を聞いて一ぺんきりでもう覚えてしまったんですけどね、ずうっと昔にしかね、長い丸い数珠をみんなで集まって廻しながらやるんですね、南無阿弥陀仏のうたをですね、

〈な～むう～だあ～ な～むう～あ～みい～だあ～ぶう～う～つ なあ～むうう～あ～みい～だあ～あ～ぶうう～つ な～むうう～あ～み～だあ～〉

——ご詠歌ですね。鳴海に聞かせたら「ちよっと違うな」と言うかも知れませんがね。まあご参考までに。

それから、詩の中に「ナホトカ」が出てきます。(資料を示しながら)このアルバムはシベリア、日本人収容所 | | これは私、先だって佐倉市の市立図書館分館で見つけたんですよ。それを全部コピーしたんですけど、あとで回覧します。この中に……これ、ナホトカ集結地に集まった兵隊です。それでこういうふう(レーニン)の肖像画も掲げているんですよ。みんなこれ、赤旗ですよ。そしてそういうふうな状況。これは非常に珍しいアルバムなんですよ。皆さんに是非回覧させて見ていただくかなあと思って持って来たんですけど。まあそういうわけです。では、これでどうも……。 (一同拍手)

大掛史子 鳴海さんも喜んでいらっしゃると思います。因みに、遠山さんは『詩の暗誦について』という本で壺井繁治賞(第二十七回)を受賞なさっていらっしゃいます。

次は、鈴木文子さんです。鈴木文子さんは「詩人会議」「炎樹」「野田文学」の同人でいらっしゃいます。鳴海さんとは大変お親しくて、特に鳴海さんが愛していたハーブを受け継がれて、いまだに鳴海さんのハーブを栽培していらっしゃるという方です。詩集の『女にさよなら』でやはり壺井繁治賞(第二十回)を受賞されています。最近、『夢』という詩集も大変好評です。

## 8 鈴木文子

こんにちは。鳴海さんの研究会はなるべく賑やかに、朗らかに(笑)、楽しくやりたいなあって、いつも私は思っています。鳴海さんはいま皆さんがお話しされたように、確かにすごい詩人でした。私も「文子！」と言われて(笑)いた一人なのですが、鳴海さんはどうもいま考えると後ろにも眼があった詩人だなあというふうに思っています。

私と鳴海さんの出会いといいますと、一九七四年に千葉の「詩人会議」というのが発足しました。当時、いま朗読された遠山信男さんが代表でした。遠山さんはとっても熱心な方で、例会とか研究会とか文学散歩とかたくさんしてくれました。その当時、私の母も詩なんて全く分からないんですけども、私と一緒に、「千葉詩人会議」の仲間が好きで、参加しておりました。その時、必ず何か手作りの料理を持参したものです。一つ作品を……。

おっかさん 鈴木文子

脳出血でリハビリ中だった母に  
詩友たちがくれた励ましの色紙

おっかさん好き！ 大好き  
詩なんかどうだっていい  
おっかさんの煮しめ以上のものが  
ありやしません 鳴海英吉

やだよ鳴海さん 大好きだなんて。  
大正生まれの女がはにかんでいた

あれから十八年

「鳴海さんが逝ってしまったよ」

〈あ きたさっ こりゃこりゃ〉

痴呆症の特養ホームのおっかさん

手踊りで車椅子を漕いで

長い廊下をいく

後姿が影絵のようだ

〈きたさっ こりゃこりゃ〉

——私と鳴海さんがわりと親しくお付き合いが始まったのは、「千葉詩人会議」もありますが一九八一年に、それまで鳴海さんは「詩人会議」の常任運営委員でした。それで「鈴木さん、タッチ！」とか言われて(笑)、なんか分からないままにタッチしたら、私が鳴海さんのあとを引き継いで常任運営委員になってしまいました。(笑)それから多分私のことを「文子！」って呼ぶようになったんじゃないかなって、いま記憶の中にあります。それと、先ほどから皆さんから言われておりますように、鳴海さんは不受不施派の研究者でいらっしやいました。柏とか私の家の近辺にもその史料があつたらしくて、調査によく見えておりました。そのとき時間があると私の実家に寄りまして、それこそ母親の手作りの料理で父と何か一杯カチンなんかやって、お互いに戦争の話やら何やらしていた記憶があります。それで、鳴海さんに聞いた話でたった一つ私の記憶に残っているんですが、そのとき私はお勝手で聞いていたのでよくは聞こえませんでしたけれども、何か鳴海さんが目頭に涙を溜めて話しているのを聞いたことがあります。

歌

(『ナホトカ集結地にて』より)

煙草(マホルカ)をおれたちに配り終えると  
ばあさんが齒の抜けた黒い口で言うのだ  
わしの孫がのう あんたらと戦って  
ノモンハンで戦死した

ばあさんは一生懸命で駆けてきた  
足が弱いのか杖をついて駆けてきた  
白い髪がまゆのようにまるいばあさんである

おれたちを恨んでいるかいと聞く  
うんにああ もう忘れた  
ずいぶん昔のことだし  
男たちの領分のことで分らねえが  
女らには むごい戦争でありました

絶対天皇崇拜者の男が  
煙草にむせて涙を流し  
ばあさんと言ったきり なにも言えなかった  
おれの肩を叩いて苦しいと言った  
移動トラックが動き出す  
おれたちは軍歌の一ふしを合唱した  
(ここはお国を何百里 離れて遠い満州の)  
うたごえはしめっぽく みんな言うのである  
ばあさんの孫は おれが殺したんぢやない  
白いまゆのようなばあさん

秋

ふつとなにかの気配を背中が受けとめたから  
おれはふりかえてみた  
なにもなかった

斜面の草が黄色く枯れ始めた日本人墓地  
白樺の墓標のなかに  
おれだけしか信じないものが立っている  
おまえが死んだとき おれは羨ましかった  
いいなあ—と思った  
おれが おれの方に歩いてくる  
切れものように 駆けてくるから  
おれはうずくまった  
びゅう おれの耳をかすめる  
鳴き声のようだった とおれは一しゆんの  
去るものを聞いた  
秋になってしまったのか おれは  
寒いなあ これからの冬を耐えられるか  
大丈夫かい  
おれの背中を叩いて おれは言う

—「詩人会議」は、創立二十五周年のときに「ロシア・ソビエト 詩とロマンの旅」という海外セミナーを開催いたしました。その時に案内してくださったのが、今は故人になられてしまった草鹿外吉さんでした。私もその旅に参加して、帰ってきて一篇の詩を書きました。

旅 — ハバロフスク 鈴木文子

ハバロフスクの日本人墓地には  
西洋らしい白い囲いがしてあり  
花が供えてあった  
真中の墓石には  
日本人墓地 1956年 と  
黒く刻まれていた  
持って行った日本酒をかけ  
たばこと線香を燻らせながら  
鳴海英吉の詩を  
旅行団の  
秋村宏団長が朗読した

ここに坐らせてもらう 一ぱいどうだ  
シベリヤで死んだ あんた  
亡者同盟代表って肩書きでどうだ

べつに 日本の美人ばかりを  
選抜して来た訳ではないが 日本の女だ  
抱いてもいい 胸をのぞいてもいい  
あんた 亡者だもん 分かるもんか  
(鳴海英吉 「じゃあ夏」部分)

朗読の声は  
乾燥した大陸の空気を割り  
あたりの木々や草に染み  
日本人の肉に凍み

砂地に吸いとられていった  
目を閉じていると  
シベリヤの太陽が髪を焼く  
体が小さく揺れ  
悪寒が背すじをはしる  
私に 亡者がきているのだろう  
きっとそうにちがいない  
〈よかったら兵隊さん〉  
〈胸を広げようか 裸になろうか〉  
〈同情なんかじゃなく〉  
〈観光客なんかじゃなく〉

ゆっくりと寝そべっているような  
ロシア人の墓には  
テーブルと椅子が備えてあった  
死んだ人が食事をしたり  
近所の人と団らんするためだという  
お膳も座布団も知人もない  
日本人墓地の後にまわってみると  
墓石は  
白いのっぺらぼうの石塔だった  
ありきたりの言葉しか浮んでこない  
自分にイライラしながら  
鳴海英吉の詩を置いて  
さよなら。

——「文子、下手っぴい！」って、鳴海さんが言ってるんじゃないかと思います。ありがとうございます。  
した。(一同拍手)

大掛史子 すばらしい詩の朗読で最後を締めくくっていただきました。皆さま、ほんとうにありがとうございました。

## ◎第三部 シンポジウム／鳴海英吉の詩と朗読

コーディネーター…佐藤文夫

パネリスト…上手宰、本多寿、辻元佳史、原田道子

佐藤文夫 時間が三十分ほど押していますので、「シンポジウム」という形式がちよっと無理じゃないかと思えます。今ちよっと四人のパネラーの方にご相談したのですけれども、あと一時間しかないんですね。そうすると、一人十五分でしょう？ それを分けてやるとシンポジウムにとでもならないので、まず最初にそれぞれ十分ほど鳴海さんについて語っていただき、それから最後にまとめてまたお話ししていただくという形に変えたいと思えます。

ご紹介します。辻元佳史さん。(拍手)「分裂機械」というたいへん恐るべき雑誌の同人の方であります。それから本多寿さん。(拍手)本多寿さんは『鳴海英吉全詩集』を出版してくださった版元で、宮崎からわざわざ来てくださいました。本多企画の代表であります。それから上手宰さんですね。(拍手)上手さんは「冊」、「詩人会議」で活躍していらっしゃる方です。それから原田道子さん。(拍手)「鮫」のもっとも若い同人の方(笑)です。

初めに、さっき尾内さんから靖国の話がちよっと出て、柴田さんから靖国の話が出たのですが、鳴海さんのこの『全詩集』の中にも……ちよっと一箇所だけ関連がありますのでこの百八十五頁に「おれの戦争予報」という詩があります。その終わりの方に《で どうなんだ 戦争があると思うか／おれ言う 戦争はポツパツするであろう／今度は あんたらの死ぬ番／日本のためではなくアメリカのために／だから あんたら 靖国神社に 入れない》—というふうにな、それで《戦争は ある／用意はいいか 若いもん》で終わっているんですね。これはほんとに鳴海さんが、さっき遠山さんもおっしゃいましたが、戦争予報は当たらなければいいんですけれども、何か非常な当たりそうな気がしてきました。靖国なんかも今年は例大祭、これは小泉・ネオコン総理大臣が行くんじゃないかと思うのですが、これなどもやはりさっき水崎さんのお話もありましたけど、アジアそれから中国、韓国、朝鮮に対する責任を放つたらかして、非常に危機を強めていると言わざるを得ないと思えます。

それでは最初に十分ほど、原田さんの方からお願いします。原田さんについて資料をちよっとお手許にお配りしてありますので。

原田道子 柴田さんの語りの伝達のジレンマについてお話がございました。戦争に二度招集された大正生まれの父も、実は、短歌では表現しておりましたが、直接にその話を語ることは一度もありませんでした。

それで、今回「朗読」ということのニュアンスが最初ありましたものですから、鳴海さんの声を聴く、傾けたらどうなるかということで、まず鳴海さんの朗読を試みたのですが、そのことでお話ししたいと思っております。ここに座っているわたくしという存在は、その身体機能について究極的には外界についての認識装置である—という考えがあり、わたくしはそのように頑固に認識している一人でありまして、その確認を鳴海さんの作品を通してなら可能なのではないかというののチャレンジです。

『全詩集』の葉でコーディネーターの佐藤さんが鳴海さんの詩的魅力について書いてありますが

《でき上がった作品は声にだして読んでみること》というくだりがありました。それで、実はわたくし自身も自分の作品を長年、必ず「朗読」よりも「読んでいる」という一人なのですが、朗読ではなくて声をゆっくりと確かめるようにまず「声を出す」「耳で聴く」「確認する」という作業で、表現された自分の世界と身体とのズレがないかどうかを「声」と「耳」と「脳」という身体で確かめようとする。その一瞬一瞬に自分が本来表現したかった世界と微妙にズレがあると感じる時には、助詞一つ、例えば「が」なのか「は」なのか、それだけでもとにかく拘って、その修正にかなりの、時にはそれだけで何カ月もかかるということもありました。そこで、このシンポジウムの依頼がありました時に、「鳴海さんの声、心を聴きたい。とにかく声に出してみよう」と思い、というよりはそういうように自分でも書いてきましたから、ぜひ鳴海さんの声を聴きたいという願いに近かったでしょうか。それでこの『全詩集』の〈序詩「ふさ子」に寄せる五篇〉に耳を傾けようと、精神統一をして試みたわけです。お渡しした資料の「接岸」のフレーズ、《うおうー叫びにならない うめきが ゆふぐれの朱が 寝そべっているような 祖国の山と浜に 叩きつづける》。——これは散文詩ですから、歩行のような感覚で自分がゆっくりと歩きながらこの鳴海さんが語ろうとした世界を感じるわけですが、これがもうたまらなくわたくしの中では読めませんでした。以前鳴海さんのこの詩を黙視で読んでいましたが、黙視の時にはこのようにならなかったわけですので、それはわたしにとってはかなり意外な出来事でした。この鳴海さんが書いた声、もっと言えばこの場合の最初の五篇ですが、これは「ふさ子さん」の声ですよ？ その声は確かにその場に居合わせたように、わたくしがそうであるかのような臨場感に心が震えたのは、多分わたくしが抱えた人生と重なる部分が多かったからだ、ここからが、本日の展開のスタートといえます。声を出したことから、何が生じたかという視点において、スイスの思想家のマックス・ピカートという方が次のように書いているそうです。

《人間は日常言語において人間や物について自分が語ることを聞いている。詩においては、物が物自身について語ることを聞くのである》

まさに冒頭に申し上げた、究極的には外界についての認識装置であるわたくしの心に届いた声は「鳴海さんが聞いたふさ子さんの声」であるという、この世界はまさに詩そのものであり、そこに鳴海さんの詩の世界、自分が語るのではないという独自性を、改めて実感した思いです。

この鳴海さんの詩の独自性ですが、これは仏教的ニュアンスが非常に漂うその独自性について、石村柳三さんが次のように細かく書いておられます。《内面的リアリズム精神と語り部の詩をマッチさせた独自の詩法だ》と。鳴海さんの詩に散見される庶民仏教徒としての詩人の質、それは先ほど何度か「南無阿弥陀仏」という朗読もありましたし、南無金剛遍照という空海のそれもかなり書かれてあるのですが、そのことについて近づいてみたいと思います。

その前に、わたくしと鳴海さんとの初対面は多分、わたくしが高松から東京に戻って来たのが一九八五年、多分翌年の一月だったと思いますが、一九八六年、「詩と思想」新年会の受け付けをしていた時です。鳴海さんがいらしてわざわざ「こういう者です」という紹介があり、その時から近からず遠からずの関係がずっと続いておりました。多分……鳴海さんの朴訥な人柄もそうですが、わたくしの中に同質な匂いを感じ、好意を抱いたからだと思っておられます。それはシベリヤの不条理の世界にあって「生きている」という観念ではなく、「生かされているのだ」という境地、そこにわたくしは多分同じようなものを嗅いだのだと思います。

なぜ同質かということなのですが、二つあります。先ほど「南無阿弥陀仏」というのをどう読むのかというくだりがありまして、実は義兄の「南無阿弥陀仏」の声明が格調高いと申しますか、それがわたくしの中になんか残っておりまして、——そういうことがわたくしの中になんか影響を及ぼしたかなあということ。二つ目は、夫の転勤に伴い香川県高松市に七年間在住しまして、鳴海さんの世界にある遍路の世界、空海の世界を暮らしの中で間近に理屈抜きに接したということが多いかと思えます。そんな中での宇宙とフラクタルな関係にある「生かされている」という実感、強烈な体感をしたことがあります。今でも忘れもしない一九七八年一月四日、真冬のことです。その時に蟻などはいるはずがないのですが、その高松の防波堤に一匹の蟻が蠢いていたわけです。そこで眼下に動き回る一匹の蟻を身動きもしないで見つめているわたくしの存在と宇宙との関係に生じた鳴海さんの境地——生かされている——という、そんな衝撃がずっとわたくしの中に残っています。

それでこの「南無阿弥陀仏」との関係なのですが、近頃ある本の中からこのような一文に出会いました。《「南無阿弥陀仏」とは、仏自身が自分を言っている言葉であり、その仏の名乗りが私に反響しているのだ》と。つまり《「南無阿弥陀仏」を唱えるとは、仏の方から私を呼んでいる言葉が私という存在に当たってごだましていることをいう》と。これはまたいずれ鳴海さんとつながっていることなのですが、先ほどこの(資料を)渡したのはわたくしにも「南無阿弥陀仏」にかかわる表現があり、それは鳴海さんとかなり酷似している。ただ、わたくし自身としては鳴海さんと出会ったのが八六年ですから、その前の詩集のことは存じ上げておりませんから、今回初めてこの『全詩集』を拝読して知ったことが多ございまして、お手許にあるこの『ナホトカ集結地にて』のパート2の「雪」、そのあと先ほど朗読なさった方もいらっしゃると思いますが、この「南無阿弥陀仏」です、それとわたくしの『あけび物語』の(コピーの)2枚目。最後の方に《(なむなむ。なあ。む)》とここに切つてあるやり方。これは鳴海さんが「言葉を解体する」と後ほど書いておりますけれども、いずれまたそれは触れますが、多分これは眼で見るよりは読んでいただくことの方がつながるかと思いますので、後ほど時間がありました時に是非皆さまが「朗読」ではなくて確かめるように読んでいただければ幸いです。

また、この話がありました時にちょうど詩集などを整理することがあり、鳴海さんとわたくしの関係を新たにみつけました。詩歴に鳴海さんが「月刊近文」に執筆をしていることがあったということが載っておりますが、実はわたくしも、赤石信久さんの紹介で大阪の伴勇さんに(鳴海さんと似たような感覚)乞われるままに「月刊近文」に執筆、鳴海さんもほとんど同時期に書いていらっしゃいました。もちろんその頃は当然のことですが、あまりこの「月刊近文」のことについて鳴海さんとお話することはなかったものですから、「月刊近文」にわたくしと鳴海さんの名前が掲載されていることを、改めて手に確認しますと、詩的方法論においてやはりリンクするところが多かったのだと、今つくづく思っております。それはわたくしと鳴海さんがあまり深い話をしなくても、「よう！」……わたくしのことは多分「おみっちゃん」とか(笑)おしゃっていたと思うのですが、そのような関係の中で、多分鳴海さんもそのようなを感じて下さってお話し下さったのだと思います。

それからもう一つ「リアリズム」のことですが、「創作覚え書」に鳴海さんがやっぱり書いているんですね。四九二頁から四九五頁ですが、日常的素朴リアリズムではなく、真のリアリズムについて次のように言及しています。《戦争詩自体は重要なテーマだが、いつも同じテーマ手法では発展しない》という指摘の中で、一遍上人の《(仏も神もなかりけり、なむあみだぶつ、……)》として仏も否定していることに注目。すなわち「捨離(捨ててこそ)」ということに注目したわけです。鳴海さんは、それを「解体」と名付けたとあります。言葉自体のもつ機能そのものの解体ではなく、生き生きと生き返らせるために言葉のそのものを解体、例えば「リンゴがリンゴだけでしかない」表現、(日常を素朴に詩の中に持ち込む)ではなく、リンゴの本質に迫るということ。それを言い換えますと、「(おれ)という詩人の中で検討」「再吟味」をし、日常性を解体、詩人のリアリズムとして「再び詩として再生産」する。一方で解体し、一方で再生産するのだと。この「解体」といわれる真のリアリズムがこの『全詩集』の冒頭にある「接岸」、そこに充ち満ちていたから、わたくしのあの涙はそうなのだといま改めて実感しています。

もう一つ付け足しますと、この鳴海さんが名付けた「解体(捨ててこそ)」という解体の意味をわたくしはこう捉えました。「人間の認識の仕方は第一次、第二次、第三次までである」言語の論述機能である二次過程ではなく、自我意識を超えて自己と非自己のない一元的に目覚める」ところ。三次過程の超越、それを鳴海さんは「解体」という表現をしたのではないかなと思います。

上手宰 鳴海さんとの関係を言うと、私は「冊」という同人誌をやっていたんですが、調べてみるとその七九年の三月頃から三号か四号書いてくれて……というか「入れろ」と言って同人になりました。タイトルは全部「ナホトカ集結地にて」ですね。最後の方はちょっと違う詩もありました。ただ、「冊」が七年間出なくなってしまい、再編時に同人をはずれました。それともう一つ、「赤提灯」という朗読集団がありまして、毎月一回朗読をしていました。鳴海さんはその会員でもあり、お歳はそこそこ行っていましたけど気が若い人だったので、今日いらっしやっている辛鐘生さんとか筒淵剛史さんとか彼らは二十代、筒淵さんは十代だったかな？ 僕も二十代でしたけど、偉い人がみんないなくなっちゃってちょっと分裂状態で、その時に鳴海さんというのはやっぱり若い人と一緒にいたい人みたいで、ずうっと一緒に朗読していました。私が一番最初に聴いたのはその「赤提灯」よりもっと前だったかも知れませんが「五月に死んだ ふさ子のために」というのを読むんですけど、だいたい途中で詰まってしまっただけで最後まで読めないですよ、泣いちゃって。ですから僕たちは、『『五月のふさ子のために』を読みます』とか言うと、「ああ、また読めないだろうなあ」と思うんですよ。思うんだけど、まあ首垂れて聴いてましたけどね。すると、また読めない。それはもうほとんど儀式のように展開されていきましたね。それは私たちにとっては、戦争とかいろんなことを理屈では知ってましたけれども、でもこれが戦争なんだと。まあそれはちょっと単純すぎますけどね、そういう一つの鳴海さんの想いというのをそこで感じたし、その詩がまたいい詩でしたからね、すごく感動的なものでした。

「千葉詩人会議」で千葉の詩人の連載インタビューというのをやったことがありまして、かなり面白いインタビューになりましたけど、その中で、「自分の詩は全部朗読するんだ」と。僕は気がつかなかったんだけど、『ナホトカ集結地にて』は全部「赤提灯」で読んだ、それで最終的に直して仕上げたんだというようなことを言われてましたね。とにかく読んでいたことは事実なので。鳴海さん、詩を読むと、字で読んでいてもみんな鳴海さんの声が聞こえてくるんですよ。だから非常に困ったもんだなという、そういう弊害もあるかなと思います。ではあるけど、その詩が良いから鳴海さんの声でもまあいいだろうというぐらいの……みんなに怒られそうなこと(笑)言ってますけど。今日の葛原りょうさんなんかの朗読の方が上手いですよね。ではあるんだけど、やっぱり鳴海さんの読み方というのは独特なピシッと決めるところがあって、一直線に読み進んでいくその迫力というのはやっぱり相当なものでしたね。終わってみたら鳴海さんの詩はすごいな、朗読はすごいなという印象をいつも持ちました。

あと、皆さんその場にいた方は分かると思うんだけど、昔のNHKのアナウンサーみたいに原稿を読み終わると一枚ずつ捨てるんですよ。よくヒラヒラヒラッと音を立てないでというのをやったあと、終わってから慌てて(笑)集めるんですけどね。その姿が非常に何というか面白いというのか、カッコ良さのあとにその後始末してる(一同笑い)というところが非常に面白かったですね。

やっぱり彼がよく読んでいたので非常に印象に残っているのは、「さよなら」という『ナホトカ集結地にて』の中の詩で、

最後まで さよなら と言えないか

最後まで 手をふらないか

さよなら と言わないか

どうしても 言えないか

おれは黙りきって

煙草を海に投げつつけている

(「さよなら」最終部分)

——という、これが「言えないか」「言わないか」というような自分の中の葛藤を語るような……この詩を彼はほんとうによく読みましたね。当時僕はまだ二十代でしたからね、その意味が分かったつもりでいたんだけど、今度亡くなってみて本を全部読んでみてあの詩の重要性というのが非常によく分かりましたね。

それで、ナホトカ集結地に来てそこから日本に帰って来るということはどういうことだったのかというと、僕の中ではずっと「シベリヤからナホトカ集結地まで来た」というところまでしか分かってなかったんです。今度、鈴木比佐雄さんが中心になって完成した全詩集で「接岸」という詩に出会いました。その中で、ナホトカ集結地から初めて日本に入ってくることを知って、またこれは非常に感動したんです。そしてふさ子さんというのはほとんど、ほんとの少女で顔をちょっと見たぐらいの間柄でしかなかったわけですね。僕たちはそうじゃなくて、もっと恋人だったんだと思っていたんですけど。そうじゃなくて、それを頼りにずっとシベリヤの酷寒の中を生き抜いてきた。そして帰ってきたのが「接岸」ですけれども、「接岸」はそこで非常に感動的に終わるわけだけでも、実態はどうかといったら、そのあとに続くのは「五月に死んだ ふさ子のために」だということだった。彼はずっと彼女を思い描いて会うことを楽しみにそのために生きてきたんだけど、日本に帰って来た時にそれがもう失われていたという、それが日本における出発だったわけですよ。 「さよなら」が、戦友たちの「球体の墓」との別れである反面、日本に帰ってくると、今度はマイナスからプラスの方に行くはずだったのがやっぱりマイナスだったという、非常に悲劇的なものではあったと思うんです。シベリヤに関してはね。ただ、そのあと鳴海さんの独特な生命力というのか庶民性というのか、「庶民性」と言うのはどうも抵抗がありますけど、そういう生命力の中でいろんなことを書いて来た。またシベリヤのいろんな女性なんかを描くにしても、新しい違った見方で書いていたところが鳴海さんのやっぱり新しい力だと思うんです。

それからもう一つ、彼が「誤解されている」と言っていたのは「あそこのナホトカ集結地というのは、全部自分の体験じゃない」ということです。ナホトカ集結地というのは、あれはいろんな人が集まって来るわけですね。そこでいろんなことを語る。それを煙草(マホルカ)に書いたりとか、記憶したり。そして書いたのがあの詩集であって、自分の体験ももちろんあるんですがかなりいろんな人の体験を書いている。ということは、その詩集の成り立ちが一つの語り部的な要素を非常に強く持っていて、ですから、日本に帰って来てからいろんな、浪曲がどうだとかそうした詩とは違った緊張感がありますよね？ あの透明さを獲得したというのは、やはり「或る語り部」としての責務感のようなものが非常に出ていて、そこは「石原吉郎さんなんかと俺は違うんだ」って言っていましたけど、でも共通する透明感みたいなものがあの詩集にはあるような気がします。それで語り部であるが故に、彼はスターの活弁さんの息子さんでしたが、だからということはいくつかも知れないんだけどやはり「語り部」と「朗読」というのが繋がっていったんじゃないかなという気がします。

あと、鳴海さんが亡くなってから詩人論を二回書かされたので、その二つ目に書いたものの中で「鳴海英吉は誰だ」という問いと「ふさ子とは誰だ」という問いを自分なりに考えてみたんです。ふさ子さんというのは横浜で空襲で亡くなった元許嫁だというような、それは事実としてそうですけど、そうじゃなくて、なぜ彼はふさ子さんというその後結婚した人がちゃんとしたのに詩に書き、朗読し続けたのか？ それは永遠の死者であって、どんなに美しい、いま生きている女性が美しくはじけて可愛らしくても、「私のふさ子」には絶対なれない——というのは、そこに象徴化されたイメージというのがもう誰にも手が届かないわけですよ。自分も届かないし、妻も届かないし、そういうものとしてあった。それがふさ子であって、また鳴海英吉は一人の鳴海英吉ではなく、やっぱり無数の鳴海英吉がシベリヤから帰還したし、そこに帰った時に無数のふさ子が命を落として、もういなかった。だけどそれを一般論として書くことは意味がないというか、それは社会学者や歴史家に任せておけばいいこと

で、やっぱり彼は一人の少女について書かなければいけなかった。それは一人の少女でなければならなかった。そのためにはどうするか。鳴海英吉は沢山の鳴海英吉ではなくて、一人の鳴海英吉として詩人とならなくてはならなかった——というふうには私は思います。

奥さんのことをいつも考えるんですけど、家庭を愛する立場の私としては(一同笑い)……詩集に出ていますが、奥さんが八月十五日に誕生日なんです。八月十五日といえば当然反戦の集会とかがありまして、それで出かけて行っては飲んだくれて帰ってくる。いったいどうなってるんだ、妻は彼にとって何なんだ? というような感じを受けますけど、そういう懺悔の詩がありましたね、後ろの方に(笑)。……まあそれはちょっとした冗談ですけど。ただ彼は「あるモチーフについての正誤表」というのを書いていて、それは一人の死というか、これは「接岸」について書いているんだけど「戦争によって引き起こされる悲劇」というものは、基本的には、人間の生きることの挫折又は挫折されるものへの反撃の自分の確認でもある」ということでいろいろ書いています。そのあたりに漂う雰囲気として、非常に象徴化したふさ子さんがあまりに伝説化されることに対してね、そうじゃなくて、実際に生きた人間としての鳴海英吉も存在しているし、奥さんも存在しているということがあったんじゃないかなど、これは非常に俗な見方ですけどそんな感じを私は持っているんです。

最後に、私は好きな人の詩集をもらった時には名前だけじゃなくて詩集の中から何かひと言書いてくれと、そう言って頼んだら、鳴海さんが『ナホトカ集結地にて』の扉に書いてくれたのは、「赤旗の赤が念仏のようにしみてくる」(「旗」より)というのがありました。これは書いてくれたのを忘れていて、何十年経ってまた見て「ああ鳴海さんが生きてきた時代というのは全てそこにあるのだなあ」という気持を最近思い出しました。(一同拍手)

本多寿 皆さんの先ほどからの講演も含めて聴いていて、作品について細かく触れる余裕はありませんけど、やっぱり鳴海英吉という詩人の「シベリヤ」というものの重要性、これは本を作る時からそう思っていました、特に『ナホトカ集結地にて』と『サカロフスカ国立農場にて』この二冊は非常に大事なものだと思います。いま上手さんとも言われましたように『ナホトカ集結地にて』は特に、人からの聞き書きがモチーフになっているものもあるということを知りました。それは読んでみると収容所、収容所内の強制労働のいわゆる記録でもあり文化誌で、項目を挙げてみますと、(1)捕虜、強制労働者の生活環境・作業環境及び監視人たちの動向、というのがある。(2)食生活。何を栽培し何を食べていたか、また料理方法などもあります。それから病気、餓死、そして埋葬の仕方、それから脱走兵のこと、戦友との関係、性的問題。女性労働者や近隣の農夫、夫がいない農夫あるいは女子。そういう人たちとの関わり。それから子供。農場に働きに行った時にあらわれる子供との関わり。それから過酷な労働の中でうたわれる歌、ロシア共産党に対する思い。望郷の思い。——概略を言うとういうことが作品を通して分かる。そしてそういう記録の中でいろいろ出てきますが、それは非常に赤裸々に書かれる。猥雑なことも含めて。それは鳴海英吉という詩人が自らの極限での体験、経験をユーモアさえ交えて心理を飾らずに語る。これは何か鳴海英吉という詩人の人間性に関わってくることだと思うんです。兵隊である前に、まず逞しい生活者として地に足がついている。度胸があって、涙もろくて。で、弱者に対して優しい。この『サカロフスカ国立農場にて』と『ナホトカ集結地にて』の記録は、鳴海英吉という一個の人間が体を張って生きてきたもっともリアルな証でもある。それでこの生き方はどこで培われたかという、戦争に行く前にすでに培われた鳴海英吉という人間が戦争に行きシベリヤに抑留されていく、そのシベリヤに抑留されるまでの生き方がここに投影される。そしてシベリヤから引き揚げてきた戦後の生き方というのは、それにプラスαされたシベリヤでの体験が、プラスαされて展開されていくというふうな作品がなっているような気がするんですね。それを思うと、この二冊の詩集を読み解くということは、鳴海英吉という個人の過去にも未来にもこのナホトカとサカロフスカ国立農場での経験、そこを現在点において見ますと、その過去と未来がここに集約されている気がするんですね。手がかりの全てがここに、エッセンスが詰まっている。この二冊の詩集を読むということが、他の作品にも当然投影されていきますけど、他の詩人たち、それから詩人でもなくてシベリヤに来た兵士、収容所にいた人たち、他の戦争の作品で「銃の来歴」などもそういう人も含めて人間を見る眼差し、何か記録性を持っている内容、そういうものは単なる鳴海英吉にとどまらない核になっていく。他の例えば僕が知っているシベリヤ抑留体験をもつ詩人というのは、長尾辰夫が戦後す

ぐに確か『シベリヤ詩集』というのを出されたとか。それから石原吉郎さん。それから、これは最近私が出した本ですが、高森文夫という中原中也の朋友だった人です。そういう他の人たちについては、詩の背景といいますかどういう所で暮らしたかというのがなかなか分からないところがあるんですね。鳴海さんの詩を読むことで、そういう抑留されて強制労働された人間、詩人も含めて背景が分かるというような面を持っていると思っています。だからこの鳴海英吉の「シベリヤ」というのは、単なる一人の鳴海英吉という人間のシベリヤを超えて、何かそこに生きた、生かされたといいますか、人間たちの最大公約数としての意味をもっているのではないかと思います。これはこういう形で細かい展開をしていくと、よく分からなかったシベリヤをテーマにした書かれた詩、そこで生きた詩人たちの今まで分からなかったようなものが、もう少しこれを鏡に照らすと分かるんじゃないかという気がしています。問題提起だけで終わります。(一同拍手)

辻元佳史 私も若手、若手と言われていたうちに三十八になってしまいました。あまり若くなくなってまいりましてね、本業も忙しくなって来まして、あんまりこういうシンポジウムにも出なくなっただけです。今日は何でこんな所にいるのか——一つは鈴木比佐雄さんに強く、強引に呼ばれたというのがあります。もう一つは、先ほど私より若い世代の葛原りょうさんが「(鳴海さんに)生きていうちに知り合いたかった」とおっしゃっていましたが、私はギリギリ知り合えたんですね。私が多分生きている鳴海英吉さんと接触できた最後の世代でしょう。いま考えると幸せです。ところがですね、よく一緒に酒飲んだりする話が鈴木比佐雄さん経由であつたんですけど、ちょっと忙しかつたりしてできなかったんですね。だから会合なんかで何回かお会いした時に「この人、辻元です」「辻元さんです」と紹介されると、鳴海さんが「うん！ お前頑張ってるな！」——あのでかい手でパン！ とやられる。それだけなんですよ。それでしばらくどこかで飲んでいらっしやって、また戻ってきて「おう！ 君か！ 頑張ってるな」(パン！)(一同笑い)……接触というのは、いま考えてみるとこれが二、三回あつただけなんです。「何も私、頑張ってます」と言いたかつたんだけど(笑)。だから鈴木比佐雄さん経由で聞いている分には、何かその時点で若い詩人の中ではわりと私のこともお気に入り的一位に入っていたらいいんですが、そこらへん何がお気に入りだったのかよく分からないんですけど。多分、ストレートなところとかリズムのあるところとか共通点は無くはないなというのは、いま思うと思えます。

それで、鳴海さんという人の貴重な点というのが一つあると思います。つまり懲罰召集で兵隊に行つて、それで前線では兵隊として戦つて、今度はラーゲリに行つて、帰つて来たら自分のフィアンセが死んでいた。つまり「加害」と「被害」両方やっていますね。なかなか一身に戦争の両面というものを全部負っている人というのは、意外にいそうでないような気がします。それで山崎正和なんか言ってますけれども、日本の場合『戦陣訓』というのは例の東条英機の出した「生きて虜囚の辱めを受けず」という、これは原作は島崎藤村だそうですが、あれのあるお陰で日本というのは前線の、実際に敵と戦つた経験のある人が意外に、まあはっきり言って生き残ってないんだという話があつてですね、だから他の欧米諸国と違って、銃後で爆弾を浴びたつていう経験の人は多いんですけど、前線で戦つたという経験の人が意外に生き残つてもないし、発言もあまりしてないという言い方というのがあります。あるいはまた、保阪正康という最近非常に活躍している戦史評論家が言ってますが「私は戦争でこんな酷いめに遭つたという言葉伝えていくのはとてもいいことなんですけど、それを積み重ねていけばなかなか普遍的な考察に繋がっていかない」という言い方をしています。これもその通りだと思うんですけど。

それで例えば私、自分と自分の配偶者に祖父が四人おりますですね。四人がどんな人だったか、戦争中に何やっていたかという、一人はついこの間亡くなりました。フィリピンで陸軍少尉でした。この人は戦友を背負つてジャングルを逃げまどう経験しかしてないそうです。あとは何も覚えてないんです。「戦争」つていいたら、逃げまどうこと。もう一人、この人はずっと前に亡くなりましたけど、これは関東軍で経理をやりました。関東軍で経理をやつていて実戦経験がない。そして何を言つたかという、これはとんでもないことだけど、「戦争はえらい楽しかつた」と言つてました(笑い)。いや、でもやっぱりそういう人がいるんですね。現実に経験したと言つたつて人によって違いますよね。もう一人はですね、これは軍属でした。終戦時はもう四十過ぎていましたので軍属でして、これもまあはっ

きり言って大した経験をしてない人。もう一人はですね、実を言うと特攻隊で行っています。陸軍の伍長だったのが二階級特進で曹長かなんかになったんですが、それでまあ練習機かなんかで飛んで行った人が一人います。四人いてもこれだけ違います。それぞれの立場で「戦争体験」と言っただけで相当違いますが、そうしますと、それぞれが自分の経験を拠り所としてそこに寄っかかるのはいいんですけど、それをてんでに述べても普遍的な話にならないわけです。そこでイデオロギーで手っ取り早くまとめて告発するっていう姿勢をあんまりやりますと、特に最近の選挙の結果なんか見ていると、今の若い奴はそういうのが駄目なんですね。(笑)そういうのは嫌だって言うんです。ところが鳴海さんというのは、非常に自分でも自分を相対化して恰好いいことが嫌いですよね。「自分が恰好良く見られるの嫌だ」って先程来皆さんそれをおっしゃっている。同じ詩集でも、例えばふさ子さんの詩集だったらふさ子さんをメインにしますよ、普通ならあれを。なのに何か浪曲の話(笑)タイトルにしてみましたよね、わざとご自分でも「俺、そんな恰好良くコクハツつつう柄じゃないよ」というのを見せる人ですよ。そういうところがある。あるいは、抑留者だから普通ソ連軍なんか憎くてたまらんはずなのに、「ロスケの兵隊」に自分の成田山のお守りをあげるという、これは相手に対して非常に思いやっていますよね。あるいは「内務班で殴られた」という詩はけっこう僕は見ますが、自分が古兵・上等兵の立場で四十ぐらいのロートルの徴兵年限間際みたいな二等兵をしごいたっていう詩を書いていますよね。これ、「しごいた」という詩を書くっていうのも珍しいと思います。「銃の来歴」も珍しいです。あれを読んだ僕の知り合いの銃マニアという軍事マニアの若い奴がですね、「これはいい詩だね」って。どういう意味で良いのか、要するに資料として良いと言うんですよ。三八式歩兵銃の分解手入れなんて書いている詩人、他にいません。(一同笑い)あれを読んだら、ちゃんと分解手入れの仕方が分かるんです。「スピンドル油を差して」(笑)なんてのが書いてありますね。あるいは前受領者のネームプレートが付いている。軍衣のこのへん(内側)に歴代の受領者の名札が付いているのはマニアはよく知ってますけど、銃にも付いているのなんて意外に知らないって言うんです。そういう一つひとつのことというのはなかなかありそうでないんです、ああいうことを書いている人って。私は不勉強だから知らないだけかも知れませんが、あんまりいないなあと思うんです。

それから、鳴海さんの詩っていうのは若い人に受けると思いますね、あれは。私は栗原貞子さんの「生ましめんかな」なんていうの、小中学校の社会科の教科書で読みました。国語じゃなくて。それであれ、印象に残っています。あの鳴海さんの「ふさ子さんシリーズ」なんてのは社会科で教えたらいいかも知れないですね。それで「こういう詩人でした」と。自分も酷いめに遭ったし、でも自分も兵隊として戦ったこともあるしというのを、先生が子供に教えなきゃいけないからね。そうすると非常にいいと思うんですね、ああいうのを載せたらね。

あと、今の若い人に受けるという要素をもう一つ言いますと、先程来皆さん素晴らしい朗読をされていたけれども、この人の詩ってすごいリズムがありますね？ 私はね、(以下、棒読みあるいはラップ風読み方で)《もらったおれは とまどってしまい／おしい花くれたあーと 花をふりかざし／花よりじゃがいもの方がいい／花より団子で 日本では言うんだ》(『定本ナホトカ集結地にて』「花」より)ってこれ、今のラップですよ。こんな風にはできる。この人の詩っていうのは、ラップになっちゃう。このリズム感というのはすごくて、私がもし朗読やったら、はっきり言ってこんなふうになっちゃいますよ。(笑)正統派で切々と迫るように読まなくてこんなふう流しちゃうこともできる。ご本人もねえ「俺の詩、こんなもんだあー」って言いそうな気もする。——そんなことで、若い者に受ける要素があると思うので。特に9・11より前にあの方は亡くなっちゃいましたから、9・11以後のこの、あの方は便衣隊とって非正規線(テロ、ゲリラなど)の経験もありますね？ だからこの非正規戦が戦争のメインになってきている今の状況なんて見たら、もっとおっしゃりたいことがいっぱいあると思うんですけれども。Googleなんかで検索しますと、鳴海英吉という名前で出しますと百三十七件しか出てまいりません。夏目漱石七十万件、吉本ばなな十七万件、辻元佳史(辻元よしふみ)でも一万五千件出てまいります(笑)。鳴海さんが百三十七件じゃもったいないので、私も自分のブログでもちょっと鳴海さんのことを取り上げようかと思っています。やるとパアッと伸びますから。あれは若い人に読ませるといいかも知れないなと思います。でもこの間の選挙なんか見えていまして、「増税」だとかなんとか言ってもですね、今の若い人は自分が払うと思ってない。何か他人事だと思ってる。「憲法九条」といっても何か

「お前が兵隊に行くかも知れない」という話を若い奴らは、若い奴と言うと失礼だけど、ちょっとそういうところがあります。先程来の話で、靖国とか天皇とか、君が代日の丸——これは、日本でずうっと反戦平和的なことを言ってきた人たちはそういうことにだけ注意していればいいと思ってたと思うんですよ。こういうものに対しては、ところが、この間の選挙なんか見ていればちょっと違いますね。今の若い人たちは日の丸君が代とか天皇なんか全然興味ないです、はっきり言ってそんなことは。そうじゃなくて、どっちかというドゥーツとファシズム的なんです。サッカーの会場で「日本！ 日本！」と騒いでいるアレです。ああいう熱狂ですよ。だからちょっと違うんですね、昔風の右傾化とかカーキ色の軍事的なイメージと違う新しいナショナリズムが明らかにでてきております。こういう時代こそこの自分を相対化して、ある一定のイデオロギーから攻撃するっていうんじゃない鳴海英吉さんの詩っていうのは、これから有効じゃなかるうか——というような気が致します。ここまでです。（一同拍手）

佐藤文夫 以上、四人の方のお話がありました。たったこれだけの時間でも、非常に新しい鳴海さんというのが見えてきました。ほんとうはもう少し時間があればより鮮明に鳴海英吉が見えてくると思います。今日はそのきっかけなんです。

最後にひと言ずつお願いします。

原田道子 シベリヤ体験について、この『全詩集』の四四四頁「〈人間の本願〉ってのは如何が……」というところにちょっと出ています。これは「南無阿弥陀仏」の延長線上で書いているんですが、「弥陀本願」が、あると云うこと感じとり方、これは、やはり人間とことんでなければ分からない。あの苛烈なシベリア抑留のなかで、石原吉郎氏は、とうとう〈弥陀〉を見ませんでしたようですね。それでも〈弥陀〉は立っていたとしたら……」となっています。やはり阿弥陀というものの見方はここに尽きるのかなという感じがし、鳴海さんはそこをもとことん分かった上でこの詩を書いていたのかなと思います。この一文のところまで納得がいったという感じがわたくしの中ではいたしました。

上手 ちよっと思い出して……。鳴海さんが石原吉郎のことを言うときに、僕は昔「体刑を待つ詩聖」というエッセーを書いたことがあるんですけど、その「タイケイ」というのは「体」の刑罰の「刑」なんだけど、「体制」というふうにも思い込んでいるらしくて、ずうっと「体制を待つ詩人」になっちゃっているんですね。それがちよっと実際は違う。まああんまり全体には大した影響はないんですけど。それと、あととはつまらないことで……ある時飲んでいたら詩人の評価のことになりまして、壺井繁治の話になって、「なに上手、壺井繁治が俺よりいい詩書いたと思ってるわけ？」とか言ってさ、「そうじゃないっすか？」とか言ったら「上手、重たいだろう」とか言って。（笑）でも壺井繁治もすごい下手くそな詩も書いてましたよね。でもすごい詩も書いてるし。鳴海さんもすごい詩も書いてるし、時々たるようなものを書いている。だけれどもやっぱり俺のは絶対いい」と思ってるんだね、とって。「この頃俺も、俺の方がいい詩絶対書いてる」とか思う時があって……まあ詩人はこうやってプライドをもって生きて、自分が生きていた時に「俺はアイツより全然いい詩書いてる」と思って生きてるんだなあと思ってね、それが今しみじみそう言っている自分をまた自分で何か恥ずかしいと思ったり反省したりしますが（笑）。……鳴海さんもそういうのはすごく強かったんだなあと思いますよね。それだけのことをやっぱりやっただと思う。

本多寿 じゃあ僕は出会いのことを言わなかったので、出会いを。まだこの「鳴海英吉研究会」になる前の出版記念会の時のデータが残っていますが、(鳴海さんと)出会ったのは新宿西口の、飲み屋の名前は忘れましたが、浜田知章さんがやっている「だべる会」というのに行ったことがありまして、そこで浜田さんが主宰ですから反戦詩のことに話が及んだ時に、浜田さんの例えば「愛国詩集」だとかそういうのがあったのに要するにそういうのを全部十把一絡げに切り捨てるといって「おかし」「戦争協力詩を書いたんだ」というふうな論調に、僕はちょっと仕事柄いろんなそういうのに関わって読んでたので「十把一絡げにできない何かそれぞれの戦争協力詩がある。協力させられた、黙ってた、っていうような話をしたんです。そして浜田さんに「おかし」と衝突したわけですね。そしたらその時に鳴海さんがおいでになっていて……例のジャンパー姿で……その時初めてお会いするんですけど、黙って前に座ってですね、盃を出して酒を注いでくれて。で、ニヤッと笑ったわけね。ちょっと話したんですけど、さっき辻元さんが言われたように大した話じゃないんですよ、え、「まあ飲め」——と、これぐらいのことなんです。

辻元佳史 そうそう、そうそう。

本多寿 なんで注ぎに来たのかという理由は言わないんですけど、その時に、そういう……断罪しないといつか、人殺しをしているのが仲間に入れても、ちょっと悪いことをして盗んで食べたりしても断罪しない、自分もやってるというような。戦争協力詩に対しても「戦争協力詩を書いたからもうダメだ」というような断罪の仕方をしていなかった。もう少し違う眼差しで見ていたような気がします。——そういうことです。(拍手)

辻元佳史 ほんとによく画家とか芸術家、壺焼く人とかですね、亡くなるとたんに値打ちが下がっちゃう人がいるんですね(笑)。鳴海さんはいいですねえ、やっぱり人徳もあり作品も良いんでしょうけれども、亡くなってますます再評価が高まる一方でございまして、幸せな詩人でいらっしやっただと思いますし、ほんとうに取り上げるに足る素晴らしい詩人であると思います。これからも研究していきたいなと思います(笑)。(拍手)

佐藤文夫 何かご質問とか発言がありましたら、二、三いかがでしょうか？

鈴木比佐雄 『全詩集』の〈「ふさ子」に寄せる五篇〉というのは、私が提案したのですが、われわれ編集委員でもいろいろ議論があって迷った部分もあるんですけど、「接岸」というのはやはり、あの詩を読み返した時に「これは重要な詩だ」と思います。その時には発見してなかったんですけど、あとから発見した「創作日記(A)ノート」ではそのことがはっきりしましたし、あの「接岸」を読んだ時には、何かちょっと靈感に打たれたような不思議な感じがしましてね、それで「ふさ子」に寄せる五篇」を前に持ってきたらいんじゃないかということで、最終的にはそうしようということになったんですよ。それと同時に、さっき本多さんから出た『サカロフスカ国立農場にて』も重要だったんです。なぜかという、五十何篇あるんですけど鳴海さんのストックだったんですよ。時々依頼があると小出しにして、でも詩集にするって言ってたんですけどしなかったんですよ。それで唯一一冊、玉川さんに預けていたという、そういうたった一冊の詩集なのです。でも倒れた時に、いろいろこれを頼むぞと言われた時にあったんです。

鳴海さんは生涯自分の経験を反復していたんです。私は「反復の職人」という解説文で触れたの

ですが、やはり自分の経験を未来に向けて反復していった。また、絶えずチャレンジャーでいろんなところに寄稿や投稿をしましたよね。一人の若者として詩を投稿するようになって、いつでも詩が好きなんだということ。それだけちょっと付け加えたかったです。

石村柳三 さっきもだいぶ仏様の話も出てきてね。戦争の本質はやはりそういうところへ行くんじゃないかと思えますけれども。もちろん戦争反対のせいもありますけどね、本当なれば「シベリアへ行って生かされてきた」という気持を持っていたということじゃないかな。だから、原田さんの説は非常に参考になりました。それから辻元さんの「加害者であり被害者だった」と。なるほどなど、そういう感じもしました。

尾内達也 以前、「憲法フェスタ2005」というのがありまして、そこで武順戦犯管理所を経験した八十代の元兵士の方が、中国大陸でやったことを皆さんの前で語ったのを聞く機会があったんです。それを聞いていると、八路軍の兵士とか民衆とかに対して、これはちよっと口で言えないくらい残虐な殺し方をしているんですよね。柱に中国の農民をくくりつけて、拳銃の前に銃剣が付いてますよね？ それを刺したこともない新兵が刺し殺すわけです。普通は練習してからやるのに、人体を使って練習するわけですよ。だからもう内臓なんかめちゃくちゃに出ちゃうわけですよ。それで、そういうのししばらくしていくと慣れていって何とも思わなくなって、先輩になっていくと新兵が来た時に激励したりするようになるというふうな、そういう話だったんですけど。それを僕はブログ

(<http://blog.livedoor.jp/delfini1/>)に書き起こして、見ていただけるとありがたいんですけど――気持ち悪くなっちゃって途中で書けなくなっちゃったんです。そういうふうなすごいリアリティというのを中国大陸に行った人たちというのは多分経験しているんだと思うんですよ。鳴海さんも恐らくそういう経験を直接されたか、あるいは聞き及んだかしているのはまず間違いないので、そういうふうな経験について鳴海さんの詩にどこか出てこないかなと思ったら、やっぱりチラチラあるんですよね。それで、戦争詩を書かれる詩人というのは、被害というか自分が受けたことの感性というのはすごくやっぱりいつまでも残っていてそれを詩にしているんですけど、自分がやったことについての詩というのはなかなか書けないものなんだという気はするんですよ。そのへんで鳴海さんが「自分がやっちゃったんだよ」というようなことをどういうふうに分の中で受け止めていたのかということは、すごく関心のあるところなんですけれど。そういうお話をもし聞いたりした方がいたら、ちょっとお話しただければと思います。

本多寿 その片鱗といいますか、作品の中に「殺すと言ったことはあるが 殺すと言われたことはない」という書き方で始まるこれ、そういうところにやっぱりその背景になった世界というものはかなり大きいですよ。

佐藤文夫 今はただ、だいぶそういう話は現代の語り部、実際に体験した人たちが少しずつしゃべり始めているんですね。そういう記録は私はもっていますので、あとで差し上げたいと思います。

鈴木比佐雄 ちょっとね、鳴海さんは戦争末期に行ったから、どちらかというとう負け戦だったんですよ。終戦二年前ですからね、「残虐」のことはその前のような気がしますね。ただ、鳴海さんはまあ間違いなく何人が戦闘中に殺していることを書き残しています。

佐藤文夫 話を知っている人はだいたい八十三歳から八十五歳くらいの人が多いですよ。当時だいたい二十三歳から二十五歳くらい。そういう人たちが今おっしゃったようなこういう体験を話している。

佐藤文夫 そろそろ時間ですけれども、今日は、鳴海英吉さんの詩というものが、水崎さんのお話にもありましたようにいわゆるポストモダニズムとかポストアカデミズム、あるいはポスト現代詩という要素をもっていたと思うんです。新しい要素を。しかもこういう要素は、一つに言えば民衆詩の流れだと思えます。これはさっきも言いましたけど『梁塵秘抄』あたりから、あるいは万葉の頃からあったかも知れない。それからずうっと近代詩でも、あるいは江戸時代中期の『山家鳥虫歌』という民謡集がありますけど、それにも入っていますね。それから現代詩では、とくに最近では濱口國雄さんの「便所掃除」という詩を皆さんご存知でしょうか？あれを私は鳴海さんの詩ととっても繋がる場所があると思えますね。やはりそういう民衆詩の流れというのはあるんですよ、この国にはね。それをわれわれはもう少し見直さなければいけない。その中に鳴海英吉の詩は完全に入っています。五木寛之さんが「深層海流を流れる庶民の文化というはあるんだ」と言ってるんですね。私は本当に「深層海流」を流れているという「庶民の民衆詩の流れ」という観点で捉えれば、現代詩の何か新しい「寅さん路線」というような展望がひらけてくるんじゃないかと思うんです。そういう一つのきっかけになればというふうに、私は鳴海さんの詩を捉えています。

李美子 私は今回訳しながら考えていたのですが、もし韓国でこの全集が翻訳されたとしたら、どういう形で、どういう反応があるのかなど。とても興味があることです。さっきの水崎さんの話にもいろいろ考えさせられて、今の話を聴いても思うのですが、鳴海さんは「おれは確認されない死というものの怖さを感じている。それが書くことにおいて確認することである。」（「あるモチーフについての正誤表」全集「解説」から——注、筆者）って書いていましたね？最近、韓国・日本の話し合いで日本に強制連行で連れて来られた方の遺骨を返すという。韓国側では何万人と言っているんですけど、実際の日本の発表では百八十人くらい。結局、彼らも確認されないまま十人くらい一つの壺の中に入れられ、名前すら分からない人がいる。そういうふうなことをこれからの問題として、例えば韓国や他の国、特にアジアですけど、詩あるいは他の作品に翻訳されて伝えられる時にどういう形になるのかなど私は想像するんですね。というのは、最近、新聞で読んだのですが、日本の漫画で被爆者のことを書いたものを韓国で出版することになったとき、もちろん「作者の了解のもと」とは書いてありましたが、でも、「原爆を投下したのは、戦争を早く終わらすためやむを得ない決定だった」ということを韓国語版の前書きに付けることになったそうです。原作の中ではそんなこと言っていないのに。私は、新聞の記事を読みながら違和感というか何かとても不安に思ったり、お互いに交流がどんどん進んでいくことは良いことなんですけど、今日のお話を聴いていてどうなのかなと思いました。

佐藤文夫 『夕凧の街 桜の国』というのがありますね？

李美子 ……『夕凧の街 桜の国』ですね。もし今日のような会が韓国や他のアジアの国で開かれる、あるいはこの全集の韓国語の出版記念会のような席上で話される場合、さっき言ったようなブラスαの言葉が付け加えられるのかどうか。日本と韓国、あるいは他の国との事情の違いとか、歴史認識のズレでの問題ということでしょうか……

佐藤文夫 最近韓国に行って来られた鈴木さんね、

李美子 ええ。そういうのを超えるっていうことは、どうしたらいいのかと思って。

佐藤文夫 いわゆる加害者と被害者の問題……

鈴木比佐雄 ですから靖国の問題にしても、やはり侵略された側にとってみれば、やはりそれは最終的な責任者をA級戦犯ということは考えているわけですから、そのへんは日本は「それはもう時間が経ったからいいじゃないか」とかね、日本の視点で言っちゃいけないんですよね。やはり向こうの視点、向こうの眼差し、アジアの眼差し、韓国・中国の眼差しをもっていないと、永遠に溝は埋まらないと思うんです。ですから小泉さんはカッコいいかも知れないけれども、小泉さんの方向で行くとナショナリズムとナショナリズムがぶつかり合って、その根底の共通の基盤が永遠に築けないと思うんですよ。ですから日本は過大に、まあ小泉さんをあれだけ支援してしまったんですが、それはどなたかが言いましたけど「他者性というものが見失われている」状況に来ているんじゃないかと思うんです。小泉さんはオペラやハリウッド映画などの欧米だけに目を向けなくて中国・韓国などアジアの音楽や文化など芸術活動へ関心を深め、その価値を知ろうとしないとだめですよ。それは政治家だけの問題ではないですけど。

佐藤文夫 さっき辻元さんもおっしゃったけど、若い人にこの話を理解してもらおうというのは、ほんとにこれは大変なことだと思うんだけど、まあやらなければしょうがない。

鈴木比佐雄 そのためにやはり文学作品、鳴海さんのような良質な作品を翻訳して世界に発信したいと思って、水崎さんには英語で翻訳をやってもらっていますし、これからは李さんとかいろんな方に韓国語でも訳してもらったりとか、いろんな形にして将来発信できたらいいとは思っているんですけどね。そういう日を皆さんと創り出して行きたいと思っています。

佐藤文夫 そういうことも頭に入れながら、こういう問題を考えていきたいと思いますね。

李美子 さっきの「原爆投下がやむを得ない。戦争を早く終わらすためのことだ、ということで一筆入れた」ということには、どう思いますか？ だって原作にはないんです。

芳賀章内 それはどこで入れたんですか？ 韓国語で入れたんですか？

李美子 そうですよ。向こうの翻訳者が。それで、こちらも了解したんです。

芳賀章内 了解したの？

李美子 ええ。そう書いています。

芳賀章内 今のお話は、無断なら著作権条約に加盟していれば明らかにそれは糾弾される。

李美子 ありえないことですよ？

鈴木比佐雄 原爆は誰が考えたって無差別大量殺戮の国際法違反の兵器ですから。おかしな一筆ですわね。

芳賀章内 それは恐らく著者本人が納得したんでしょうね……

李美子 今現在ではそのままでは読まれない可能性があるから、だからそういうふうな一筆を前書きとして入れたと言っていました。

芳賀章内 著作権法によると著作権者が納得すれば、それは「仕方がない」という言い方になりますわね。

佐藤文夫 『夕凧の街 桜の国』の前に『はだしのゲン』というのがありますよね？ これはもう世界でいちばん原爆の漫画としては読まれている。それが逆に韓国の中ではどういふふうに使われているかという話はないですか？

李美子 それはよくわかりません。

芳賀章内 だいたい今の台詞は、「アメリカは原爆投下を「戦争を早く終わらす為には止むを得なかった」という言葉で正当化してきた。それが韓国でも流通するとは困ったことだ。原爆投下の無差別大量殺人にどんな正当な理由もないはずです。

遠山信男 今のお話は、「編集者の見解だ」ということを書き加えておけば納得いくということだったんですね。

芳賀章内 いや、編集者が作品を曲げるような解説はしちゃいけないんですよ。

遠山信男 ところが……

芳賀章内 著作権の問題として言えば、著者が了解してしまえばどうしようもない。著者が毅然として断ればいいんです。

鈴木比佐雄 やはり根本的にはですね、やはり韓国・中国と原爆体験を共有し得ないということなん

です。正確なデータがなく不明ですが、実は原爆、広島・長崎の何割かの方がやはり朝鮮半島出身の方で被爆しているんですよ。ほんとうは日本だけじゃなくて朝鮮半島の方、戦争末期の日本に在住していた強制連行などの人もいるし、または戦前からとくに戦後に「韓国ヒロシマ」といわれる陝川(ハプチョン)からのルートで来ていた人もたくさんいたんですよ。ただ日本名にしているけれど、実はほんとは韓国人・朝鮮人なんだけどという人も相当いるそうです。軍都広島で働いていた朝鮮半島の人々のそういう悲劇が共有化されてない。そういう意味では広島・長崎の真実というのは明らかにされてないし、またやはりどう考えてもアメリカのやったことは国際法違反であり、人道上やっちはいけないことですから、そのへんもほんとうは論理的にやらないといけませんね。日本の戦争責任のことは当然ですが。

佐藤文夫 シベリヤに抑留された捕虜だってね、あれは国際法に完全に違反してますよね。

芳賀章内 そうですよ、あれだって違反していますけどね。

佐藤文夫 それでそういう裁判もいま進んでいるんですよ、未だに解決しないですね。原告側は平均年齢がもう八十五歳ぐらいになるんでしょう。

鈴木比佐雄 そういう意味では、だから柴田さんが今日おっしゃったように、やはり論理的にやることは論理的にやって、日本は広島・長崎という最終戦争とも言える悲劇を不戦の思想としなければならぬと思いますね。靖国の問題でナショナリズムを煽っていると、鳴海さんの予言したように今が次の戦前になっているのかも知れませんね。。

玉川侑香 やはり鳴海さんの詩が国際性があるっていうことは、戦争の問題なんかをとっても被害者の側、加害者の側ということがあって、それぞれの国にどう読まれるかという問題はすごく大きいと思うんですけど、鳴海さんの詩の場合は結局、それを超えて人間の根源的なところでいろんな体験をして、柴田さんやら上手さん、辻元さんなんかもおっしゃいましたが、やっぱりそこに人間のいちばん大切な根源があって命の問題というそれを全然話さずに、行って敵味方なしに思いやりということが彼によっているんなどころで人を結び付けているという——それをしっかりとつ限り、私はどこの国へ持って行ってもそういう反発とかね、それはしっかりと訳された場合ですけれども、きつくないと思うんですよ。むしろそういうところを通じて、反戦であるとか平和の問題であるとかっていうことは、今から語られていく国際性をもつ作品ではないかなというふうには思いました。

佐藤文夫 そろそろ時間ですが、今日はあまりディスカッションという形ではなかったんですが、いろいろ問題が出てきたと思うんです。新しくでてきた問題もあって良かったと思います。

#### 【閉会の言葉】

芳賀章内 今日はほんとうに素晴らしい一日でした。鳴海さんについて、お話し下さったおひとりおひとりが、非常に個性的に多面的に掘り起こして下さいました。これで、鳴海さんの詩人のいわゆる価値がいままでより更にずうっと拡がったというのが、一口で言えば偽らざる印象です。今後の研究課題も含めて非常にいろいろな面が皆さんのお陰で見えたと、僕はたいへん満足しております。ほんとうにありがとうございます。これをもって今日はお終いにさせていただきますと思います。(一同盛大な拍手)